

笠間市埋蔵文化財調査報告書 8 集

福 原 原 遺 跡

平成 7 年 3 月

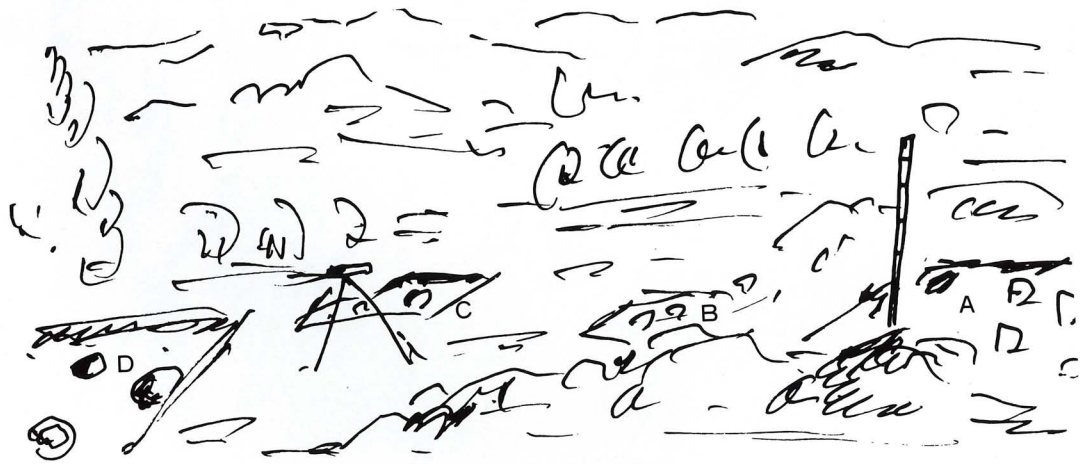
笠 間 市 教 育 委 員 会
笠間市福原原遺跡発掘調査会

「福原原遺跡」正誤表

頁	項目	行	誤	正
14	第1号住居跡	5行	本所	本跡
			P・P・P・Pは主柱でP・PP1・P2・P3・P5は主柱でP6・P7	
		6行	またPは	またP4は



遺跡全景スケッチ



- A 掘立柱建物跡
- B 第1号住居跡
- C 第2号住居跡
- D 第3号住居跡

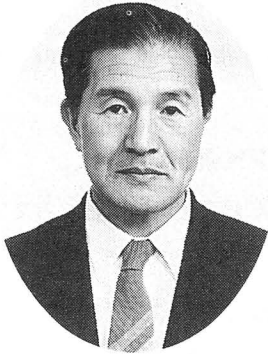


第1号住居跡カマド断面



掘立柱建物跡

序



笠間市は、豊かな自然に恵まれ、長い歴史と伝統を受け継いで今日に至っております。このような中であって、北関東自動車道・笠間インターチェンジの設置も決まり、周辺地区に住宅団地建設を目指して進められております。

その建設予定地内に周知の埋蔵文化財が存在していることから、笠間市教育委員会では、文化財保存の観点から、福原・原遺跡発掘調査会を発足させ、造成工事に先立って平成6年10月から記録保存のため発掘調査を実施いたしました。

原遺跡は、笠間市の西部岩瀬町羽黒に隣接した地で、吾国山の北麓標高約95mの舌状台地上に所在しています。

今回の調査の結果で、古代(奈良・平安時代)の集落跡で、竪穴住居跡が4軒検出され、^{かまど}竈も設けられ、柱の穴なども確認されました。又地面を掘って穴をつくり食物の貯蔵等に使われたと思われるもの、掘立柱建物跡には特異の高床式の建物と思われるものも検出されたようです。生活用具としての、土師器、碗、皿、壺等の遺物が出土しましたが、近年になって畑地耕作のため機械耕起をしたため完全なものがなく破片となったのが多くみられました。

古代の人々が、集落を形成し、生活の場としてこの台地を利用したことがわかります。この報告書により、祖先の生活の一端を知ることができるとともに、文化財に対する認識が一層深まることと思われます。

ここに報告書の刊行をみる事ができたことは、笠間市からいただきました御協力と、直接調査にあられました主任調査員、萩原義照先生並びに調査員の方々、又作業に従事されました方々、関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

平成7年3月

笠間市教育委員会

教育長 畑 岡 昭

例 言

- 1 本書は、平成6年10月5日から11月5日にかけて実施した、笠間市大字福原字原59番地の1外に所在する、福原原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、笠間市における「福原住宅団地（仮称）」造成に伴う発掘調査である。
- 3 調査は、笠間市教育委員会が「福原原遺跡発掘調査会」を組織し、本調査会が主体となって実施した。調査会の組織は、次のとおりである。

会 長	畑岡 昭	理 事	能島 清光	監 事	長谷川 淳
副会長	小林 三郎	”	天津 忠興	”	雨海 弘之
”	磯 幸一	”	矢口 圭二	幹 事	長谷川 泉
理 事	石塚 光男	”	船橋 優	”	川嶋 進
”	小室 昭	主任調査員	萩原 義照		

- 4 本報告書の執筆・編集は、調査主任萩原義照が中心となって行った。
- 5 本書の遺構・遺物実測図の作成方法及び記載方法は次のとおりである。
 - ・ 調査区内遺構配置図は1/100に、その他住居跡等の平面図・断面図・土層図は、原則として1/50の原図をトレースして版組し、それを適宜縮小して掲載した。
 - ・ 土器の実測は、四分割法を用い、中心線の左側に外面、右側に内面及び断面を表した。
 - ・ 土器の実測中、断面を黒く塗り潰したものは須恵器、実測図面は、縮尺1/3で掲載した。
- 6 本調査に当っては、市教育委員会社会教育課及び建設課の積極的なご協力を頂いたことに対し、また遺物の写真撮影は、市史編さん室の応援を得たので、併せて特記し謝意を表したい。
- 7 発掘調査及び整理に当っては、次の方々にお手伝いをいただいたので記して感謝したい。
 - ・ 調査補助員 須田 進 ・ 保坂 知子 ・ 上野 武臣 ・ 生井 友一
 - ・ 同 協力員 秋山とよ子 ・ 大崎まつえ ・ 大崎きみ子 ・ 宮崎 瑞子
菅谷ひろ子 ・ 田村えい子 ・ 仁平ふみ子
 - ・ 事 務 局 市教委社会教育係長長谷川泉・同主事川嶋 進
 - ・ 本書の執筆に当り、県教育財団本部川井正一先生より出土品の整理についてご指導を、また古銭については、茨城町の林洋一氏からご指導を頂いた、特記して感謝申し上げる。
 - ・ 遺物の註記と古銭の整理は須田進が、遺跡・遺物の実測とその整理は保坂知子が担当した。
 - ・ 本調査に当り、福原の田村昭一氏には大変お世話様になりました。特に遺物の整理や保管に際して配慮いただき、ここに記して厚くお礼申し上げます。

目 次

序

例言

第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査経過	5
第2章 位置と環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	11
第3章 遺構と遺物	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 遺構と遺物	14
1 竪穴住居跡	14
第1号住居跡	18
第2号住居跡	20
第3号住居跡	22
第4号住居跡	28
2 掘立柱建物跡	28
3 墓 坑	31
第1号墓壙	31
第2号墓壙	31
第4章 まとめ	36
※ 発掘に参加して	38

写真図版

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第12図	第3号住居跡実測図	23
第2図	遺跡の位置と周辺地形図	2	第13図	第3号住居跡出土遺物実測図(1)	23
第3図	試掘トレンチ	4	第14図	第3号住居跡出土遺物実測図(2)	24
第4図	原遺跡遺構配置図	9	第15図	第3号住居跡出土遺物実測図(3)	25
第5図	調査区設定図	13	第16図	第4号住居跡実測図	28
第6図	第1号住居跡実測図	14	第17図	掘立柱建物実測図	29
第7図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	15	第18図	墓壇実測図	31
第8図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	16	第19図	墓壇内出土遺物実測図	31
第9図	第1号住居跡出土遺物実測図(3)	17	第20図	古銭拓影図(1)	32
第10図	第2号住居跡実測図	20	第21図	古銭拓影図(2)	33
第11図	第2号住居跡出土遺物実測図	21	第22図	遺構外出土遺物実測図	34

表 目 次

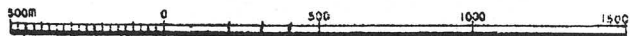
表1	第1号住居出土遺物観察表	18	表4	掘立柱建物跡柱穴観察表	30
表2	第2号住居出土遺物観察表	22	表5	墓壇内出土古銭一覧表	33
表3	第3号住居出土遺物観察表	26	表6	遺構外出土遺物観察表	35

図 版 目 次

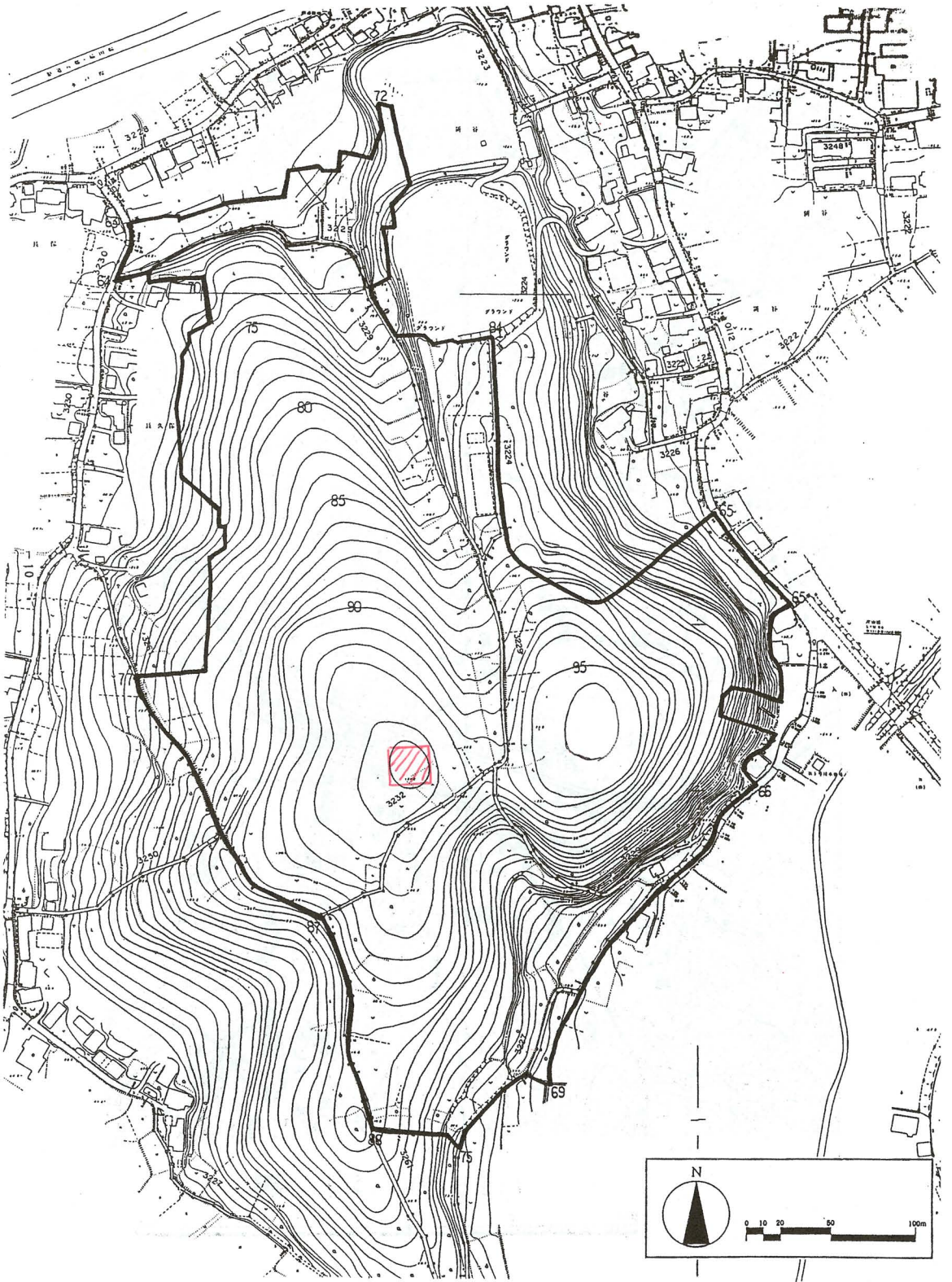
PL-1	調査前全景 ・ 調査区草刈り 調査区清穢	41	PL-8	第1号住居跡出土遺物(1)	48
PL-2	遺構確認作業 ・ 遺構確認状況	42	PL-9	第1号住居跡出土遺物(2)	49
PL-3	遺構確認状況 ・ 調査風景	43	PL-10	第2号住居跡出土遺物 第3号住居跡出土遺物(1)	50
PL-4	調査風景 ・ 小学生の見学 遺物出土状況	44	PL-11	第3号住居跡出土遺物(2)	51
PL-5	遺物出土状況 ・ 第1号住居跡	45	PL-12	第3号住居跡出土遺物(3)	52
PL-6	第2号住居跡 ・ 第3号住居跡	46	PL-13	遺構外出土遺物	53
PL-7	第4号住居跡 ・ 掘立柱建物跡 墓 壇	47	PL-14	墓壇内出土遺物	54



1:25,000 羽 黒



第1図 遺跡位置図



第 2 図 遺跡の位置と周辺地形図

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

笠間市における、「福原住宅団地（仮称）」の建設計画は、昭和63年度から「第3次総合開発計画」が策定され、その事業の一つとして、都市的機能を備えた、良好な居住環境を有した住宅団地の形成を目指すものである。

これにより平成5年6月22日、笠間市は開発担当の建設課を通し、笠間市教育委員会に対し、住宅団地造成事業の計画予定地区である、笠間市福原の原台地における「埋蔵文化財の所在の有無」を照会した。これをうけた笠間市教育委員会は、笠間市文化財保護審議委員会を開き、埋蔵文化財の有無の確認と、その取り扱いについての協議を行った。平成5年7月7日、市文化財保護審議委員の埋蔵文化財担当能島委員及び市教育委員会社会教育課長谷川係長・同 川嶋主事によって、表面観察による原台地現地調査を行い、住宅団地造成事業の計画予定地内には、遺跡が所在することを確認した。次いで遺跡の範囲確認のための試掘調査の必要を平成5年7月20日文書で市教育長に申し入れた。

平成5年12月25日、笠間市教育委員会の依頼によって、元茨城県埋蔵文化財指導員・現笠間市史専門委員でもある萩原義照が試掘調査を担当し、市文化財保護審議委員会・市教育委員会社会教育課、市建設課の協力を得て実施した（註 確認調査の概要報告参照）。

平成6年2月21日、市教育委員会は笠間市長あてに、試掘調査により住宅団地造成計画予定地である、福原の原台地の一部に遺跡が所在するので、「開発前に発掘調査による記録保存」されたい旨の回答をした。これによって笠間市は、市教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ね、その結果現状保存が困難であるとし、記録保存の措置をとることになった。

平成6年9月29日、福原原遺跡発掘調査会を設置（会長 畑岡 昭）し、笠間市と発掘調査に関する委託契約を結び、萩原義照を発掘担当者として、同年10月5日から約30日間の予定で、発掘調査を実施することになった。

福原住宅団地（仮称）造成に伴う、埋蔵文化財の確認（試掘）の報告

- 例言 略
- 調査の概要

1. 本遺跡は、笠間市史編さん委員会の分布調査、及び市文化財保護審議委員会の現地調査によって、遺物の採集が行われたため、現況畑地表面にはほとんど土器破片の散布はみられない。そこ

で採集遺物・立地条件・耕作土の観察を総合して調査地を選定した。

- 調査地は、団地造成予定地のほぼ中央に位置する台地上で、標高95.1mを測る南西部側に緩やかな傾斜を示している。調査地の現状は、陸稲畑であったところで、稲わらが全面散乱している。先に土器破片の散布が多くみられた地点を中心に、トレンチを設定し遺構の確認を行うことにした。
- Aトレンチは、南北方向に幅2m長さ20m、Bトレンチは、東西方向に幅2m長さ20mの十字トレンチを設定した。

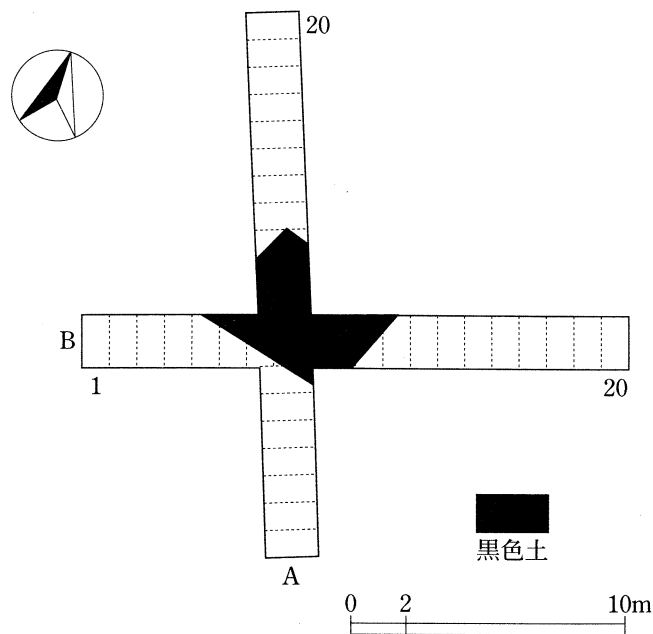
Aトレンチの耕作土(表土)は、平均30cm前後を測り、ローム粒子を含む黒褐色を呈している。この層は、耕運機による深耕のためローム層を攪拌したもので、耕作土の下はローム層に移行する。

- A・Bトレンチの交差点(十字路)のローム面に、竪穴住居跡の遺構とみられる、一辺約4.5mの黒色面を確認することができた。

トレンチ内からの出土遺物は、須恵器破片・土師器破片数点発見された。

○ 所 見

福原住宅団地(仮称)造成計画予定地における試掘調査は、造成予定地の全体からみれば小面積ではあるが、今回の調査によって、この台地上に、古代の住居跡及び関係遺構が埋蔵されていると考えられる。しかし長年月の農耕作業によって、ローム層まで攪乱された跡(トレンチによる条痕)もみられるので、遺構の存在が期待できる場所は台地上の一部であろう。しかし、開発前に記録保存のための、発掘調査は必要であろう。



第3図 試掘トレンチ配置図

第2節 調査経過

福原原遺跡の発掘調査は、平成6年10月5日から11月5日にかけて実施した。以下調査経過の概要について、調査日記から記述する。

○ 調査前の準備

9月29日 ・調査地の草刈り，実測及び調査区の設定を調査主任と市建設課職員にて行う。

10月4日 ・調査用具機材の搬入，テント設営，地鎮祭の準備を，市教育委員会社会教育課職員にて行う。

○ 調査経過

10月5日（水）曇小雨

畑岡市教育長・市文化財保護審議委員・市教委職員・市建設課職員及び発掘調査関係参列のもとに，調査地の清穢いと安全祈願祭を行う。

神事終了後，調査日課と作業上の諸注意をする。午前中調査区内の雑草の除去整理作業。午後から，重機と人力によって，調査区Aの表土除去作業と遺構の確認作業を開始する。

A-3南西隅から焼土粒確認（L94・05）。A-4から掘立柱建物跡とみられる柱穴多数確認された（L94・35）。

10月6日（木）曇後晴

調査区Bを重機によって全表土排土，B-3南隅に焼土粒や白色粘土塊を確認。B-3北隅に住居跡の存在を確認する。第1号住居跡と呼称する。

10月7日（金）晴

B全区の排土作業午前中で終了する。B-3の第1号住居跡の掘込みを行うとともに，A-4内の柱穴群の排土を行い，掘立柱建物跡の存在を確認する。

10月8日（土）作業休み

10月9日（日）晴

本日までの調査で，埋土中から採集した土器片に，黒色処理した内黒の土師器が含まれているので，平安期の集落も予想される。第1号住居跡の掘り込み続行，ベルトを残し床面検出，北壁中央にカマド跡を確認，鉄製品・鉄・須恵器片・砥石出土。

10月10日（月）体育の日 作業休み

11日（火） 作業休み

12日（水） 作業休み

10月13日（木）曇時々晴

第3号住居跡の掘り込みを行う。掘立柱建物跡の柱穴調査続行。市建設課長谷川課長・同岡野室

長・市史編さん室富田室長・同長谷川主事・市教委社会教育課長谷川係長・川嶋主事来訪。

10月14日（金）晴

各住居跡の掘り込み続行する。土師器・須恵器底部破片出土。第3号住居北壁中央部に、粘土塊・焼土粒確認，南壁部に土坑状2基確認。

10月15日（土）晴

第3号住居跡の床面掘り込み続行，南壁部の土坑状の性格確認のため，調査区を南に拡張する。A調査区の，掘立柱建物跡の柱穴群実測。A-3の北側に調査区を拡張し，遺構の確認を進める。

10月16日（日）作業休み

10月17日（月）晴

A-1北東隅に住居跡の床面に，竈跡とみられる焼土確認，第4号住居跡とする。本日までに，竪穴住居跡4軒，掘立柱建物跡が確認されたが，掘立柱建物跡の柱穴の配列をみると，柱列の間隔が90～100 cm（半間）である。束柱と思われる高床式の倉庫跡とも考えられるものである。

10月18日（火）晴

第3号住居跡ベルトセクション実測（1/20），終了後ベルト除去。同跡南壁中央部土坑内の排土作業。第1号住居跡内の柱穴検出のため床面掘下げ。午後水戸教育事務所生涯教育課田口課長・同千種埋文指導員来訪。また市教委磯次長・船橋社教課長・長谷川係長・川嶋主事来訪。

10月19日（水）曇

第3号住居跡柱穴検出のための床面掘下げ続行，カマド内焼土粒除去。第1号住居跡ベルトセクション実測，終了後ベルト除去，カマド内の焼土を除去し調査する。A-3内の柱穴配置実測。

岩瀬町教育委員会鈴木社教主事・同荒木係長・同増渕主事来訪し，岩瀬町青少年少女サークル活動の遺跡調査見学の打合せのため来訪。

市建設課渡辺部長・同長谷川課長・同岡野室長・市教委長谷川社教係長・川嶋主事来訪。

10月20日（木）雨 作業休み

10月21日（金）曇後雨 午後作業休み

第2号住居跡内ベルトセクション実測。第3号住居跡精査床面掘下げとカマド検出作業。遺構内のレベル測定。市建設課からトランシット借用。写真撮影。

10月22日（土）雨後晴 午前中作業休み

第3号住居跡床面及び柱穴の精査，カマドセクション実測，南壁に接して検出した土坑内から，古銭（永楽通宝）その他埋葬関係の遺物出土したことによって，2基の土坑は中世末期から近世初期の墓坑と断定した。第1号住居跡のセクション実測。A-3の柱穴配置実測。

県教育財団黒沢先生来訪，また元県埋蔵文化財指導員伊東重敏先生他3名来訪。

10月23日（日）晴

A調査区全体の遺構配置の実測(1/100)。第2号・第3号住居跡カマド火床部検出精査。

10月24日(月)晴 午後作業休み

A調査区の遺構実測続行。第3号住居跡南壁墓坑2基から、人骨・古銭・数珠玉・短刀残欠出土。市建設課渡辺部長・同長谷川課長・岡野室長・桜井係長・市教委長谷川社教係長来訪。

10月25日(火)曇後晴

A-4拡張部から柱穴確認実測する。第3号住居跡内の遺物収納、出土位置測定。第1号住居跡遺構平面実測(平板測量)。第2号住居跡遺構実測(水系張り)。遺構写真撮影。市教委職員4名遺跡調査見学。

10月26日(水)晴

各住居跡床面精査掘下げ、柱穴・貯蔵穴等検出。市建設課職員2名調査遺跡の実測協力来訪。岩瀬町から婦人3名遺跡調査見学。

10月27日(木)晴

各住居跡床面精査掘下げ、柱穴・貯蔵穴等検出。第2号住居跡内からは、柱穴を見つけることができなかった。写真撮影。

10月28日(金)晴時々曇

第1号住居跡カマド完掘。第2号住居跡のセクション実測、ベルト除去。遺物を福原公民館に運び、洗浄の準備をする。午後市文化財保護審議委員一行遺跡調査見学。

10月29日(土)曇後雨

午前中調査全区の精査、実測。午後公民館にて土器洗浄を行う。第1号住居跡から出土した遺物の中に、「足」の墨書を持つ須恵器を発見する。

10月30日(日)曇 作業休み

10月31日(月)晴

全調査区遺構の清掃と写真撮影。午後土器洗浄と写真撮影。

11月1日(火)晴

調査区内の清掃をする。午後調査に協力された、地域の方々(調査協力員)に対し、「原遺跡発掘調査の概要」について、現地説明会を行う。

11月2日(水)晴

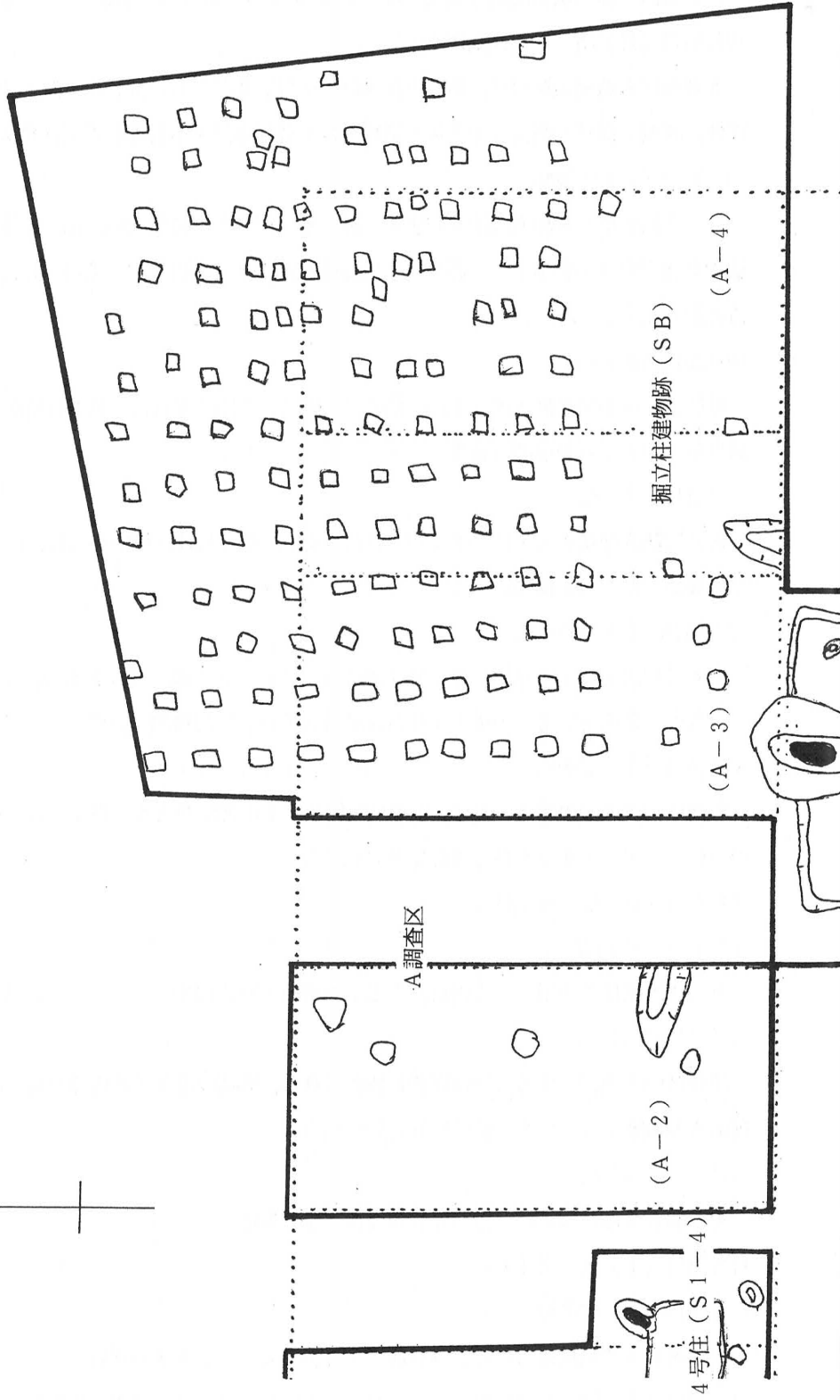
発掘調査用器具の整理。遺物発見届添付写真の撮影。

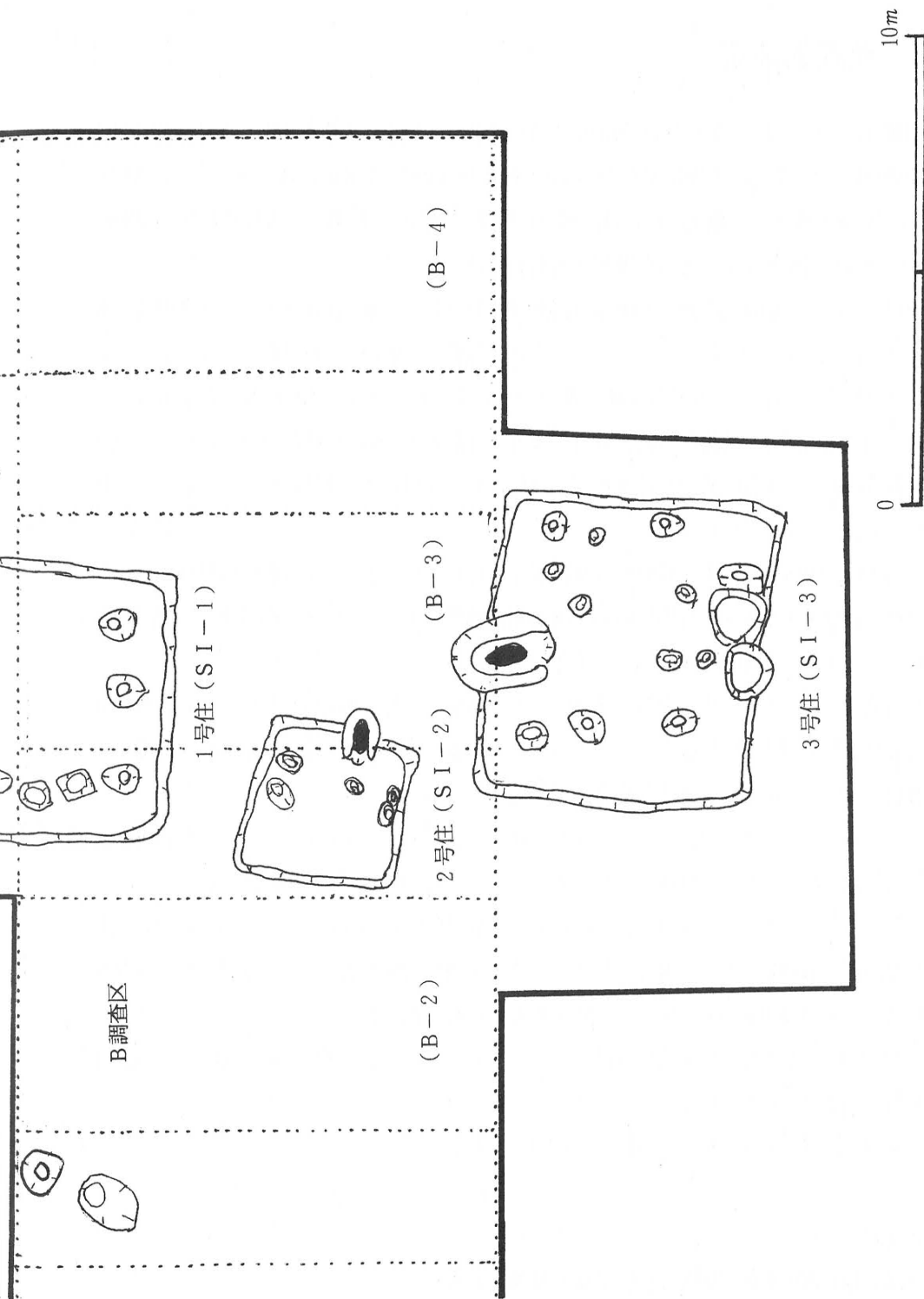
11月3日(木)曇 文化の日

11月5日(土)晴後曇

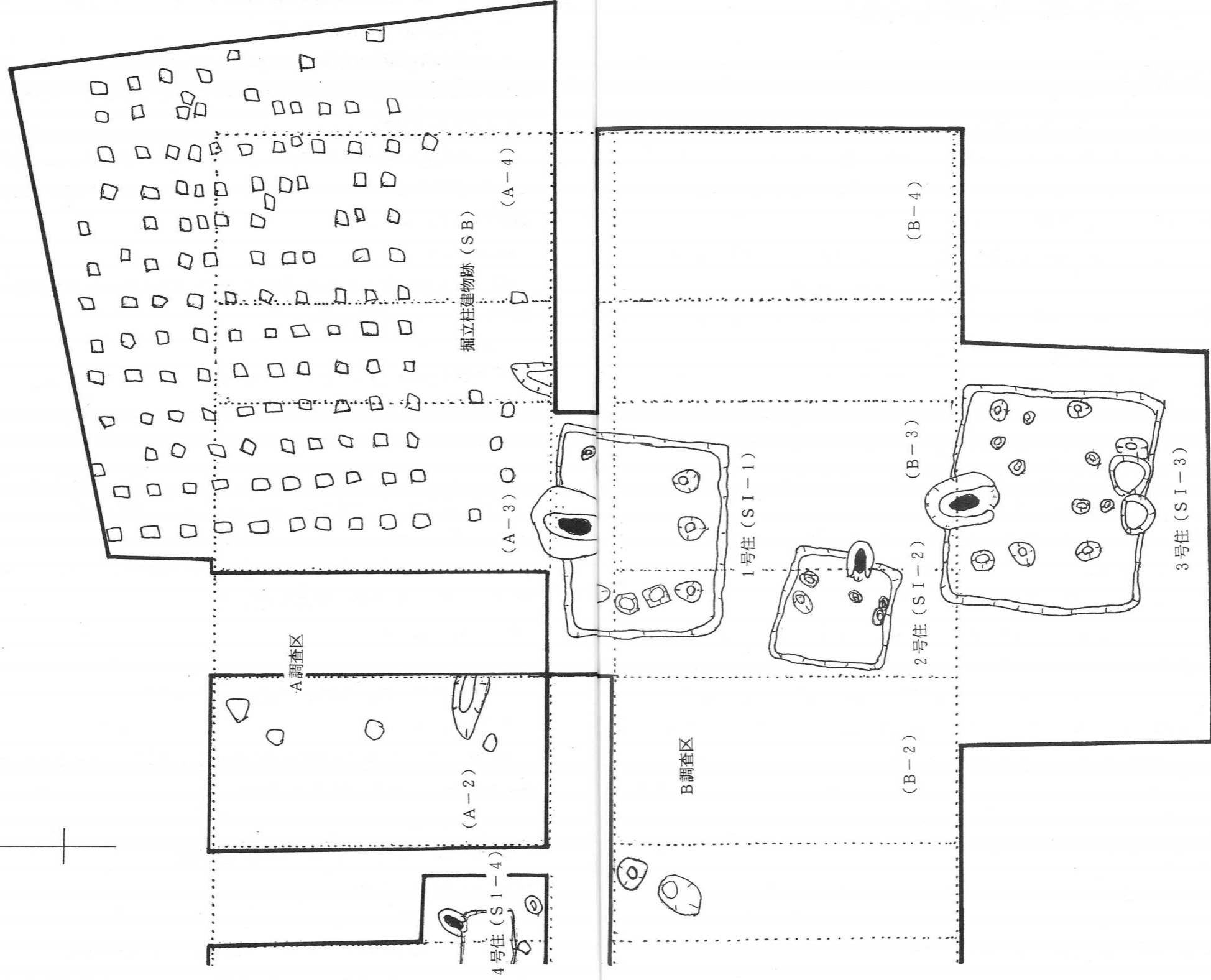
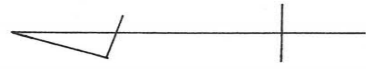
本日をもって現地における調査を終了する。用具・テント等の撤収。

11月12日(土)晴 岩瀬町青少年少女サークル活動遺跡見学・発掘現場埋め戻し。





第4図 原遺跡遺構配置図



第4図 原遺跡遺構配置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

福原原遺跡は、笠間市大字福原字原59番地の1外に所在している。本遺跡の所在する笠間市は茨城県ほぼ中央部に位置し、市域は東西16.99km・南北15.38kmで面積は131.21km²・人口31,000人(平成7年1月現在)である。隣接市町村は、東は水戸市・内原町・友部町、南は岩間町・八郷町、西は岩瀬町・茂木町(栃木県)、北は常北町・七会村と境している。

市域の周辺は、山岳丘陵が連なりいわゆる笠間盆地を形成している。山波としては、南に上加賀田の真名岳(382.2m)から吾国山(518m)へ、西方は羽黒山(250m)から棟峯(263m)へと続いている。北は仏頂山(430m)から国見山(392m)へ、東に朝房山(290m)の山群が連なっている。これら山塊の地質は、鶏足山と筑波山の二大山塊に囲まれ、古期岩類と花崗岩類に二大別される。笠間地方の岩石は通称「稲田のみかげ石」と呼ばれる花崗岩で、建築用材として広く使われ、笠間の地場産業として発達している。

盆地内の低地は、涸沼へ流出する涸沼川の水源地域として、友部町・岩間町を流れ涸沼に注いでいる。そのほか飯田川・稲田川・片庭川等の小河川も涸沼川に流入し、河川流域地帯に耕地が開け、古くから地域の人々の生活に適した環境をつくり出している。

市の東端に笠間のシンボル佐白山が違容を示し、その西麓に発達した市街地の中心は、近世の城下町としてまた笠間稲荷の門前町として発達形成されている。近年国の伝統的工芸品として指定された笠間焼は、笠間の主産業の一つである。

遺跡の所在する福原原台地の真南に、田上神社の鎮座する吾国山を眼前に仰ぐことができる。山頂附近の北西斜面には、温帯性の植物が生育しており、ブナやカエデの類がみられる。このブナ林内の下草としての「カタクリの群生地」は、市指定の天然記念物でもある。また福原原台地の北麓低地はJR水戸線が東西に通る、それと平行するように国道50号線が走っている。そのほか北関東自動車道のインター建設予定地としても、計画されている地域である。

遺跡は、笠間市の西端に位置し岩瀬町羽黒に接している。原台地は標高約95mを測り、吾国山北麓田上丘陵の北端部に立地している。

遺跡の現況は、畑地と山林で水田との比高は約34mである。

註 参考文献

- (1) 『図説笠間市史』・『笠間市史』笠間市史編さん委員会
- (2) 『岩瀬町史』岩瀬町史編さん委員会

第2節 歴史的環境

福原原遺跡の所在する笠間市は、『常陸国風土記』に「郡ヨリ東50里ニ笠間村アリ……」によって、奈良時代に自然村落笠間村の在ったことがわかる。大化改新後律令制の成立によって、地方制度も整備されて、笠間地域は常陸国新治郡に属した。風土記の郡より東の「郡」とは、新治郡衙（郡塚）を指している。新治郡衙は、岩瀬町に隣接する真壁郡協和町久地楽の古郡地内に所在したことが、考古学的な発掘調査によって明らかにされた（高井梯三郎『常陸国上代遺跡の研究』）。また『常陸国風土記』新治郡の条（挽文）に、新治郡に駅家（大神駅）が設置された記事がみえる。駅家の所在地については、諸説があるが笠間市域内の稲田・福原辺に所在したことは間違いのないところで、古代笠間の集落の存在を知ることができる。

原始時代の笠間地域内の遺跡は、県遺跡台帳に49か所が記載されているが、笠間市史編さん委員会において、『笠間市史』通史編の基礎資料作成と、併せて埋蔵文化財保護行政の基本資料を目的とした、「笠間市遺跡分布調査」を、筑波大歴史・人類学考古学教室に依頼し、平成2年から3年にかけて実施した（『笠間市遺跡分布調査報告書』）。

次に上記の報告書や県遺跡地図等によって、笠間市域の遺跡の分布状況について概観してみる。旧石器時代の遺跡とみられるものは、我が国山北麓台地の本戸地区の一部に、細石刃が採集されたといわれるが、類例が少ないので断定することはできない。

縄文時代になると、遺跡数も多くなり67か所から縄文土器片が採集されている。早期では本戸・上加賀田・石寺・片庭・下市毛等の北部・南部の山がちな地点に、花輪台式・田土下層式・同上層式・子母口式に比定される土器片が採集されている。前期の土器は、関山式とみられるものが箱田・下市毛・本戸等から採集されている。中期になると遺跡数も増加し、50か所から多くの土器破片が採集され、その位置は盆地周辺の台地上にみられる。形式別には阿玉台・勝坂式期・加曾利E式期が最も多く、特に片庭の寺平（西田）遺跡については、遺物の出土量、内容ともに注目すべき縄文遺跡である。平成6年夏期中筑波大において、片庭の寺平遺跡の一部について、発掘調査が行われた。後期の遺跡に比定されるものとして、大郷戸・片庭・寺崎・大淵・石井・稲田・福原・北吉原地区等から堀の内式・加曾利B式期・曾谷式期・安行式期の土器片が採集されている。晩期の遺跡としては、大洞C式と思われる土器片が、福田の森川遺跡から採集されたのみで、晩期の遺跡として確認された所はない。

弥生時代の遺跡としては、笠間市域全体としては少ない。周知の弥生遺跡としては、箱田うら山古墳発掘調査にともなって、弥生後期の東中根式期の土器片が出土したのみである。分布調査で確認された遺跡はいずれも散布地で、本戸・上加賀田・箱田・大淵・金井等の微高地から後期に属するものとみられる、土器片が少量採集されている。

古墳時代の遺跡としては、散布地11・古墳（群）16の計27の遺跡が確認されている。今後遺跡の見直し調査によっては、遺跡数の増加も予想されるところである。

箱田四所神社境内にある四所神社古墳群は、前方後円墳1基・円墳7基で、内2基の横穴式石室古墳は、昭和37年茨城中学校考古学クラブ（大森信英）において発掘調査が行われた。主墳とみられる前方後円墳は、全長約22.7m後円部径18.2mで、周辺から埴輪の破片が採集されている。箱田うら山古墳は全長36m後円部径25mの、いわゆる帆立貝式の形状を呈する前方後円墳で、昭和47年発掘調査されたが、主体部は検出することができなかった。寺崎古墳群（高野古墳群）は、寺崎公民館（旧寺崎小学校）と市第1保育所のある台地から、北へ長く延びた丘陵山林中に前方後円墳1・円墳1基が所在する古墳群である。平成3年住宅造成工事に伴い、市保育所裏の集落跡発掘調査の際、封土が削平された円墳の周濠が検出されている（『寺崎台地遺跡発掘調査報告書』千種重樹）。同報告書によると「円形周溝状遺構」としているが、円墳の遺構であろう。そのほか箱田古山台古墳群をはじめ、北吉原・大淵・来栖・飯合等に大小古墳や塚状が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡としては、大淵の須恵器窯跡群・石井台平安時代集落跡が発掘調査によって確認されている。また寺院跡とみられる、市役所台地南麓（地名土器内）から布目瓦の破片が採集されている。そのほかこの時代の遺跡と考えられる、土師器・須恵器の破片の散布が、石井台周辺を始め、市域内の台地や畑地に多くみられる。

前出の『常陸国風土記』にいう、「笠間村アリ」の笠間村は、石井台を中心とした地域に所在したとも考えられるところである。古代の遺跡の立地は、半島状にできた台地の先端が、水田面との比高が2～15m内外の微高地に位置するものが多い。

中世の遺跡としては、笠間城跡や麓城跡を始め金井・飯田・稲田・本戸・福原・上加賀田の数館が確認されている。そのほか地名や遺構などから、中世の城館跡と思われる遺跡が10か所数えることができる。特に笠間城跡は、鎌倉時代藤原時朝（笠間氏）によって築城されたもので、山頂と山麓を連絡した複城郭を構成し、中世城館の特色ある山城である。

笠間市域内に所在する城館跡は、室町時代特に戦国期の小土豪の構築によるものが多い。金井に所在する東西の二館は、方形館の遺構が歴然と残る注目に値する遺跡である。

註

- ・『笠間市史上巻』 笠間市史編さん委員会 1993年
- ・『笠間市遺跡分析調査報告書』 笠間市史編さん委員会 1991年
- ・『うら山古墳・石井台平安時代集落跡』 笠間市史編さん委員会 1972年
- ・『寺崎台地遺跡』 笠間市寺崎台地遺跡発掘調査委員会 1992年

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

福原原遺跡は、笠間市の西端福原公民館（旧福原小）の南方台地に位置し、標高約95mに立地している。今回の調査区域は、開発予定地内の台地上のみで面積は約1,000㎡である。

発掘調査を実施するに当たり、遺跡および遺構の位置を明確にするため、次によって調査区を設定した。日本平面直角座標X軸（南北+38,083.908）・Y軸（東西+31,810,806）の交点を通る軸線を基準にして、東西40m・南北23mの調査区を設定しA（北）調査区を4小区に、B（南）調査区を4小区に分けて調査を進めることにした。

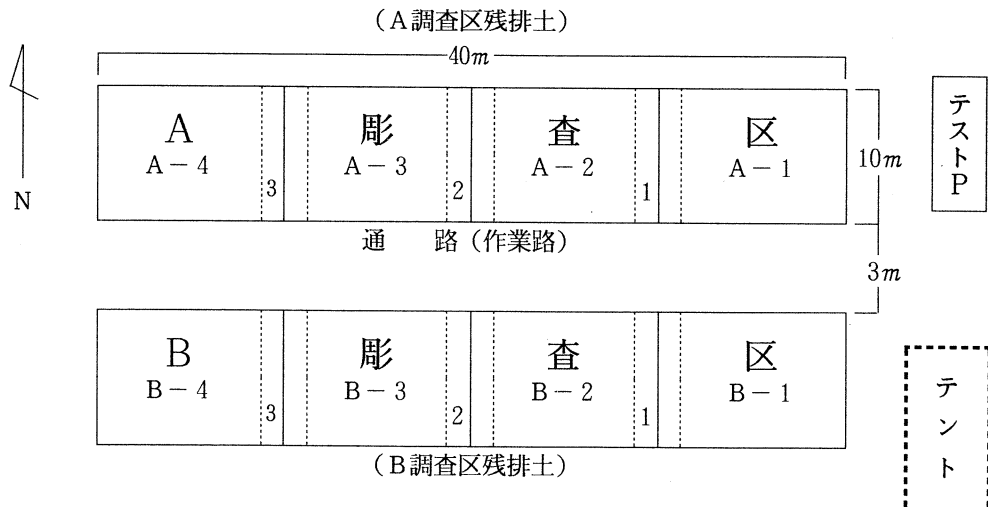
調査区の現況は畑地であり、平成2年市史編さん室の分布調査（筑波大）によって、土師器・須恵器を中心に遺物が散布していることが確認され、福原原遺跡と呼称された周知の遺跡である。

今回の調査によって検出された遺構は、古代の竪穴住居跡4軒・土坑・高床式の掘立柱建物跡である。その他近世初期のものと思われ、円形の墓壇2基が検出されている。

遺物としては、土師器・須恵器の坏・碗・盤・甕の破片で、大半が須恵器破片である。須恵器破片の中に、墨書土器4点が含まれている。また掘立柱建物跡から、黒色処理された土器破片が出土した。鉄製品に石鉄・刀子など、石製品に砥石が出土した。

そのほか墓壇内から、慶長通宝・永楽通宝など古銭42枚と短刀残欠・数珠玉が副葬品として埋納されて出土した。

◎発掘調査を実施するに当たり、遺跡および遺構の位置を明確にするために調査区を設定する。



第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

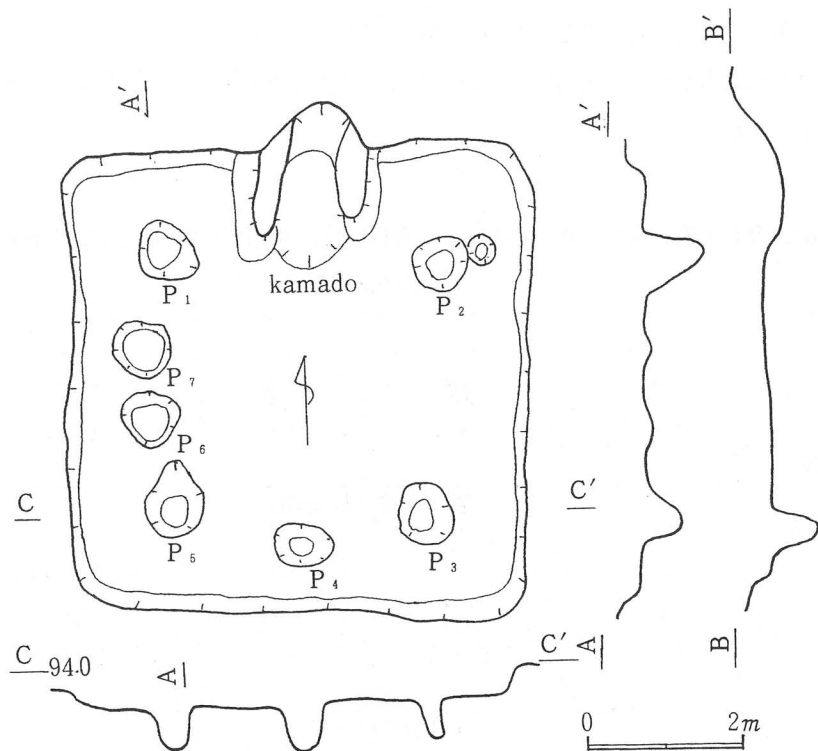
第1号住居跡

本跡は、調査区Bの中央部(B-3)北寄りに確認された住居跡で、第2号住居跡の北側に位置している。平面図は長軸6.4m、短軸5.9mのほぼ方形を呈し、主軸方向はN-3-Eを指している。壁高は30cm~22cmで垂直に立ち上っている。床面はローム層で、硬く締まり遺存状態も良好で平らである。壁溝は、認めることができなかった。

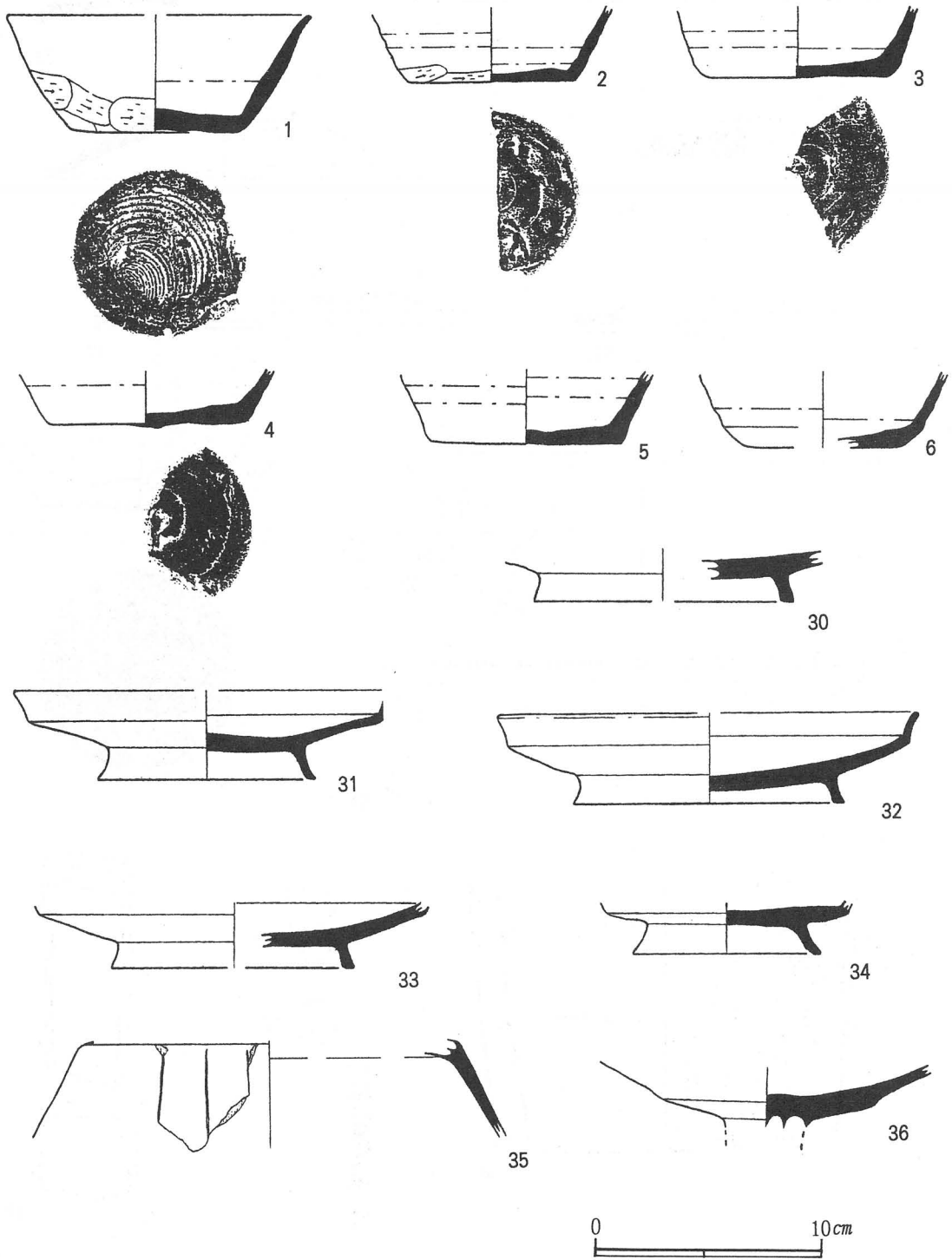
本所に伴うと思われる、柱穴は9か所検出された。P・P・P・Pは主柱で、P・Pは補助柱で、またPは出入口における梯子ピットとも思われる。

竈は、北壁の中央部に、壁を約40cm壁外へ掘り込み、白色砂質粘土で構築されている。規模は、長さ2.0m巾1.0mを測り、火床は長方形で良く焼けて赤色を呈し、奥壁に向かって傾斜している。煙道は確認できなかった。

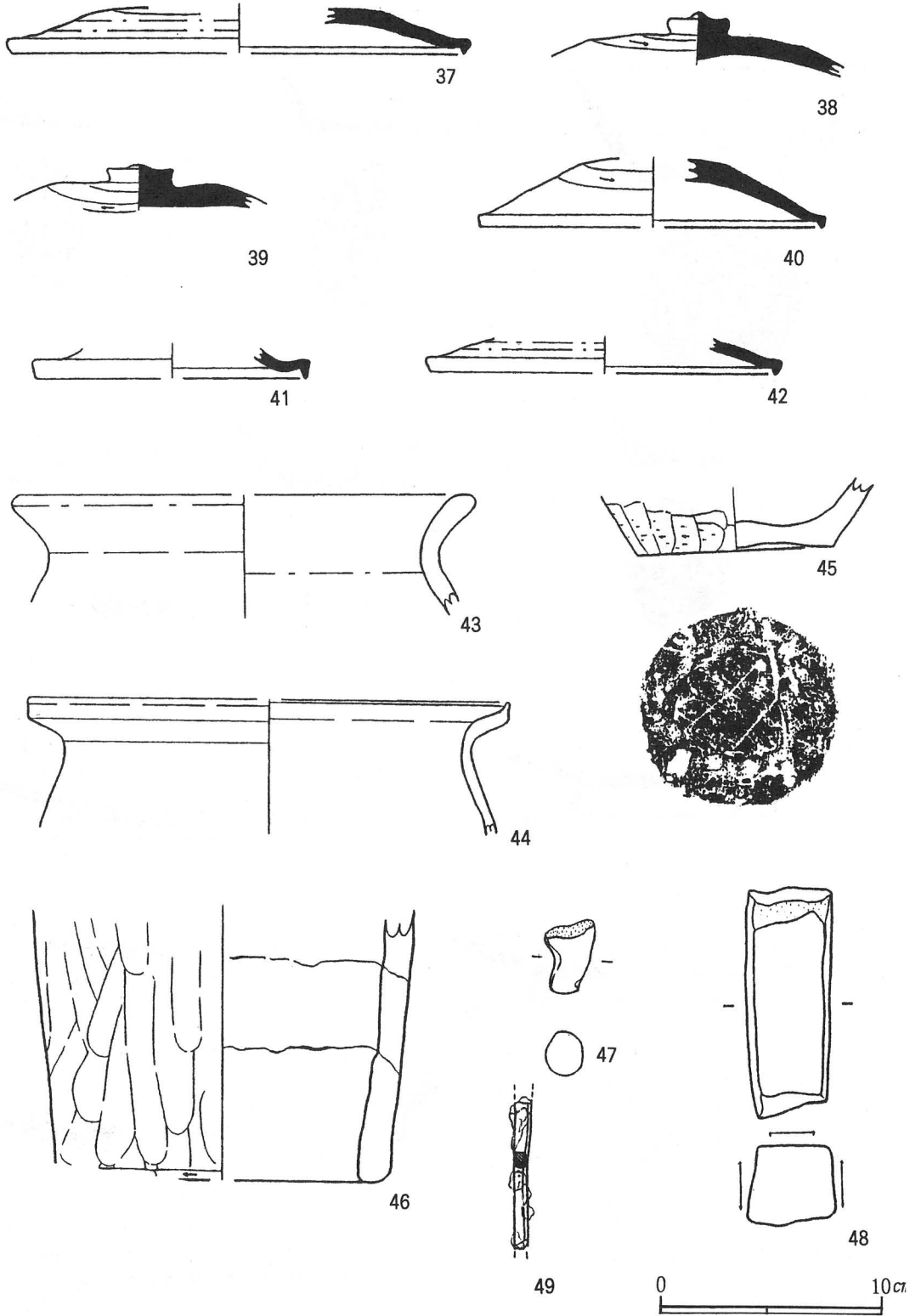
遺物は、竈内と覆土中から、土師器(甕3・甌2)・須恵器(坏8・盤5)砥石1・鉄製品5、その他細片が多数出土した。特に55の盤には「足」と読める墨書がみられた。



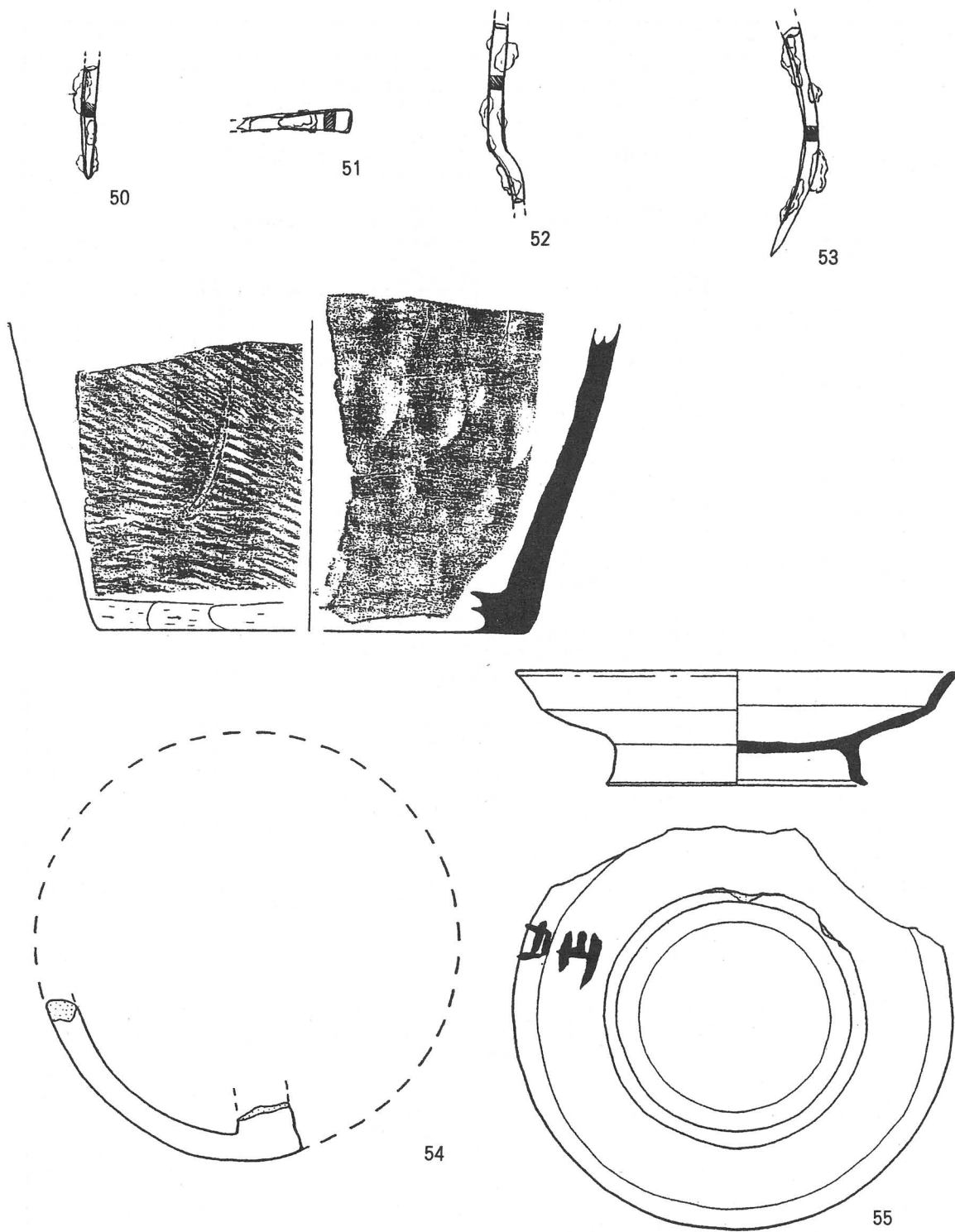
第6図 第1号住居跡実測図



第7图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第 8 图 第 1 号住居跡出土遺物実測図(2)



第9图 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

表 1 第 1 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A (13) B 5 C 7	底部平底 体部やや丸みをもって外傾し、口 縁部は器壁を減じて外反する。	ロクロ成形 底部回転糸切り後周縁部ケズリ、 体部下位手持ヘラケズリ	石英・長石・雲母 灰白色 普通	60% カマド内
2	坏 須恵器	C 7	底部平底 体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形 底部回転ヘラ起こし後、無調整 体部下端ヘラケズリ	砂粒 灰白色 普通	20%
3	坏 須恵器	C (7.6)	底部平底 体部やや外傾して立ち上がる。	ロクロ成形 底部回転ヘラ起こし後、無調整 体部横ナデ	石英・長石 暗灰色 良好	15% カマド内
4	坏 須恵器	C (8.2)	底部平底 体部外傾して立ち上がる。	ロクロ成形 底部回転ヘラ起こし後、無調整 体部横ナデ	石英・長石 青灰色 良好	15% カマド内
5	坏 須恵器	C (8)	底部平底 体部外傾して立ち上がる。	ロクロ成形 底部回転ヘラ起こし後、 軽くナデ	石英・長石 灰色 普通	15% カマド内
6	坏 須恵器	C (7)	底部平底 体部外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形 底部回転ヘラ起こし	石英・長石 灰色 普通	20% カマド内
30	盤 須恵器	D (11) E 1.3	体部欠損 高台部接地面は平坦	ロクロ成形 貼付高台 底部回転ヘラケズリ	石英・長石 灰色 普通	5%
31	盤 須恵器	A (16.3) B 3.8 D 9.3 E 1.3	底部外周がやや持ち上がり、口縁 部で屈曲し、外反する。 「ハ」の字状に開く高台が付く。	ロクロ成形 貼付高台 底部回転ヘラケズリ	石英・長石 砂粒 浅黄灰色 普通	50% カマド内
32	盤 須恵器	A (17.8) B 3.9 D 11.4 E 1.1	底部中央から外周に向けて徐々 に持ち上がり口縁部で屈曲外反 する。「ハ」の字状に開く高台 部。接地面は平坦。	ロクロ成形 底部回転ヘラケズリ 貼付高台	石英・長石 青灰色	25% カマド内
33	盤 須恵器	D (10.1) E 1.1	底部外周がやや持ち上がり、口縁 部で屈曲する。 「ハ」の字状に開く高台部。 接地面は平坦。	ロクロ成形 底部回転ヘラケズリ	石英・長石 青灰色 普通	10%
34	高台付坏 須恵器	D 8 E 1.3	高台は先端部に向けて「ハ」の 字状に開いてゆく。	ロクロ成形 底部回転ヘラケズリ	石英・長石 青灰色 普通	30%
35	円面硯 須恵器		小破片の為器形は不明	ロクロ成形 ヘラ状工具により 3 本の縦線が 刻まれている。	石英・長石 青灰色 良好	10%未滿
36	高坏カ 須恵器		坏部分はゆるやかに立ち上がり ながら、外方に開く。	ロクロ成形	石英・長石 青灰色 良好	10%
37	蓋 須恵器	A 19.4	平坦な上面から口縁部に向けて ゆるやかに広がり、口縁端部歯 短く下垂する。	ロクロ成形 上面回転ヘラケズリ	石英・長石 青灰色 良好	20% カマド内
38	蓋 須恵器	F 2.7 G 0.9	つまみは低め、中央部分が高く 突出する。	ロクロ成形 上面回転ヘラケズリ	石英・長石 灰色 良好	20% カマド内
39	蓋 須恵器	F 2.9 G 0.8	平坦な上面に、低めつまみが 付く。 つまみ中央は高まる。	ロクロ成形 上面ヘラ起こし後、軽く調整	石英・長石 褐灰色 良好	20%
40	蓋 須恵器	A (12.6)	やや急な角度で口縁部に向けて 広がり、口縁端部は短く下垂す る。	ロクロ成形 上位回転ヘラケズリ	長石・砂粒・雲母 灰色 良好	20%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
41	高環 須恵器	A (11.6)	口縁付近で一度強く彎曲してから、やや長めに下垂する。	ロクロ成形	長石・砂粒 青灰色 良好	10%未満
42	蓋 須恵器	A (12.8)	口縁端部は短く下垂する。	ロクロ成形	石英・長石 青灰色 良好	10%未満 SI-1とSI-3 とで接合
43	甕 土師器	A (19.4)	口縁部は外反し、丸く収まる。	口縁部, 内外面横ナデ	石英・長石・雲母 橙色 普通	10%未満 カマド内
44	甕 土師器	A (20.8)	口縁部で屈曲し、外反する。 端部は、つまみ上げる。	口縁部, 内外面横ナデ	石英・長石・雲母 砂粒 橙色 普通	10%未満 カマド内
45	甕 土師器	C 8.4	底部下端に、手持ヘラケズリ	ロクロ成形	石英・長石・砂粒 にふい褐色 普通	10%未満 底部木葉痕
46	甕 土師器	C (13.6)	ほぼ直立して立ち上がる。	体部 下端ケズリ 体部 ナデ 輪積痕明瞭	石英・長石・砂粒 明褐色 普通	10% カマド内
47	不明 土製品				長石 暗褐色 普通	
48	砥石					3面使用
49	鍬 鉄製品					
50	鍬 鉄製品					
51	刀子 鉄製品					
52	鍬 鉄製品					
53	鍬 鉄製品					
54	甕 須恵器	C (15.4)	体部やや外傾する。 底部多孔式	体部外面平行op 最下端ケズリ 内面無紋の押え痕	石英・雲母・砂粒 灰白色 普通	10%
55	盤 須恵器	A 16 B 4.2 D 9.4 E 1.5	底部外周すがやや持ち上がり、 口縁部で屈曲し、外反する。 高台はシャープで先端で外方へ 突出、接地部も先端	ロクロ成形 底部回転ヘラケズリ 体部内外面回転を利用したナデ	石英・長石 黄灰色 普通	墨書有 「足」 90%

A 口径
B 器高
C 底径
D 高台径

E 高台高
F つまみ径
G つまみ高

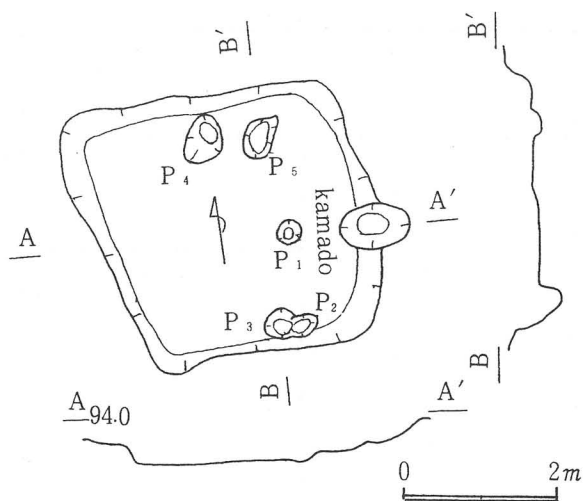
第2号住居跡

本跡は、調査区Bのほぼ中央に確認され、第1号住居跡と第3号住居跡の中間に位置している。平面形は、長軸3.7 m・短軸3.4 mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-19-Eを測る。壁はロームで壁高16cm~30cmでほぼ垂直に立ち上り、壁溝は認められない。

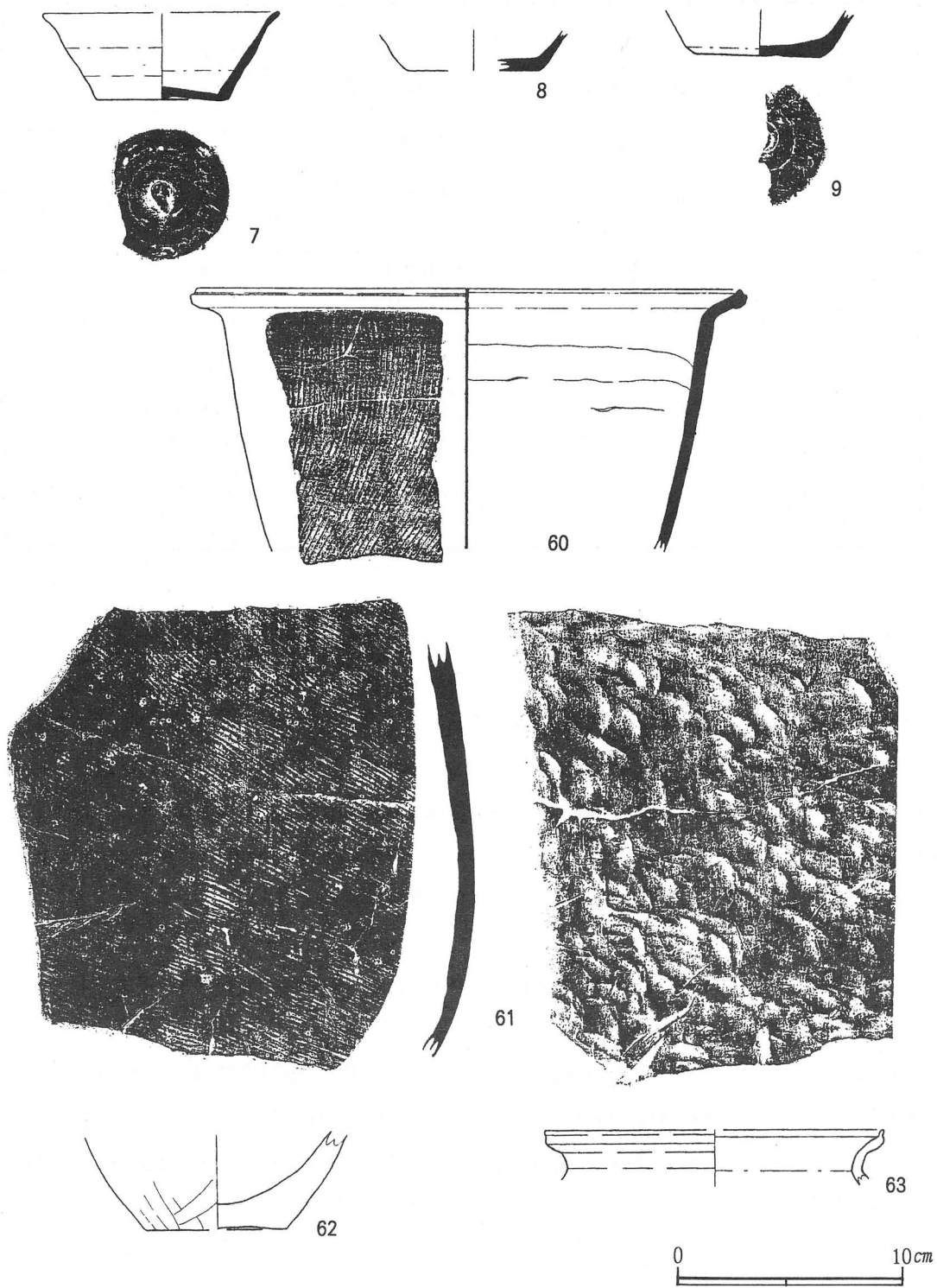
床は平坦であるが、東南から西方に緩やかに傾斜しているが、床面はよく踏み固められている。柱穴は5か所検出されていたが、これらがどんな柱の配置をとるか不明である。

竈は、東壁中央よりやや南寄りに付設されている。火床部は赤く焼けて残っているが、煙道部は確認できない。規模は、長さ90cm・巾60cmを測る。

遺物は、竈左袖部に甑・甕の破片が出土している。



第10図 第2号住居跡実測図



第11图 第2号住居跡出土遺物実測図

表2 第2号住居跡出土遺物観察表

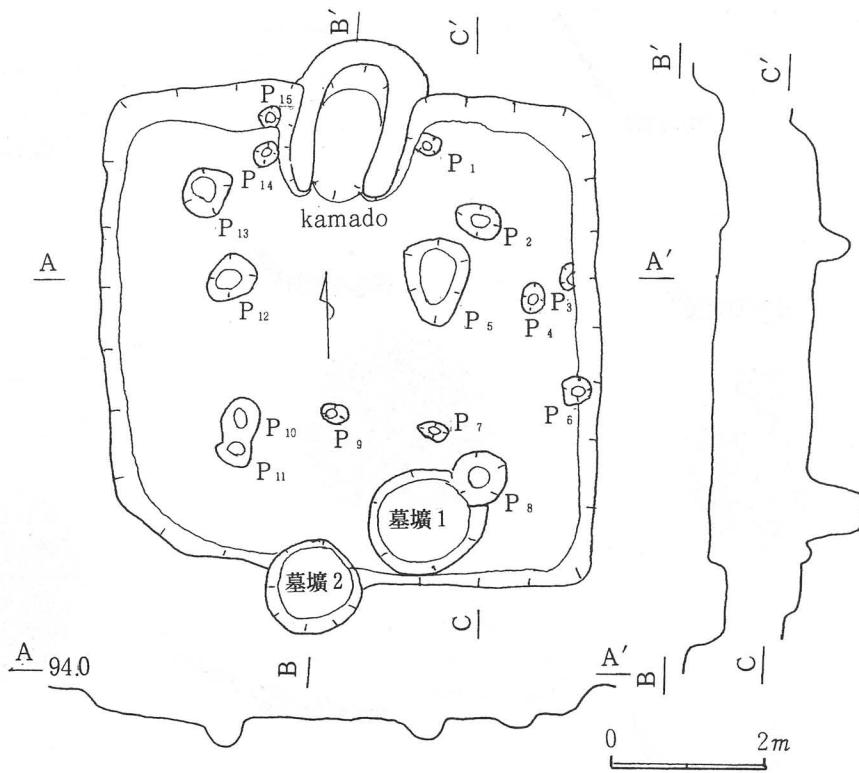
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	坏 須恵器	A (14) B 5.2 C 7.7	平底 体部 外傾して立ち上がる 口縁部やや外反	ロクロ成形 底部 回転へら起こし後、無調整 体部 回転を利用したナデ	細砂・砂粒 黄灰色 普通	60%
8	坏 須恵器	C (7.7)	平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 調整有	砂粒・雲母 浅黄橙 普通	10%未満
9	坏 須恵器	C 7.4	平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転へら起こし後、無調整 体部 回転を利用したナデ	石英・長石・砂粒 青灰色 良好	20%
60	鉢 須恵器	A (32.4)	体部は外傾して立ち上がり 口縁部は外反する 口唇部が上方に突出する	体部外面 平行opき 内面ナデ 輪積痕明瞭	石英・長石・雲母 褐灰とにぶい橙 普通	50% S I - 2 と A - 3 区で 接合
61	大甕 須恵器		器形不明	外面 平行opき 内面 無紋の押え具	石英・長石 暗灰色 良好	S I - 2 と S I - 1 と で接合
62	甕 土師器	C 8.2	底部 平底 丸みを帯びて外方へ立ち上がる	体部 下位ナデ	石英・長石・砂粒 雲母 にぶい橙色 普通	10%未満
63	甕 土師器	A (20)	口縁部 外反し、口唇で上方につ まみ上げる	口縁部内外面横ナデ	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10%未満

第3号住居跡

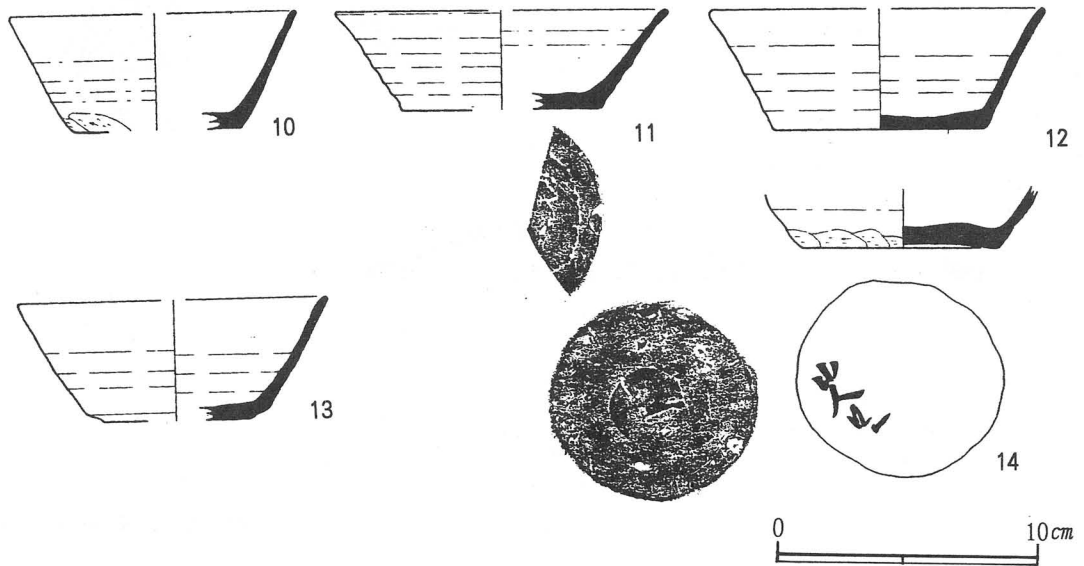
本跡は、調査区B-3の南端に焼土塊を発見したため、遺構検出のため調査区を南へ拡張して、確認したのが本跡である。第2号住居跡の南に5m、第1号住居跡から南6mに位置している。平面形は、長軸6.9m・短軸6.5mの方形を呈し、主軸方向はN-3-Eを指し、第1号住居跡とほぼ同じ規模である。壁はロームで、南壁の中央部が攪乱（墓墳）されているのを除いて、ほぼ垂直に立ち上っていて、壁高は17cm～20cmである。床面は、南壁側の一部を除いてほぼ平坦で柱穴は15か所検出されている。P₂・P₈・P₁₁・P₁₃は主柱で、他は補助柱と出入口の梯子ピットと考えられる。

南壁中央部の土坑状の落ち込みは、初め貯蔵穴かと見たが、古銭等の埋葬に伴う副葬品であったので、墓墳と断定した。

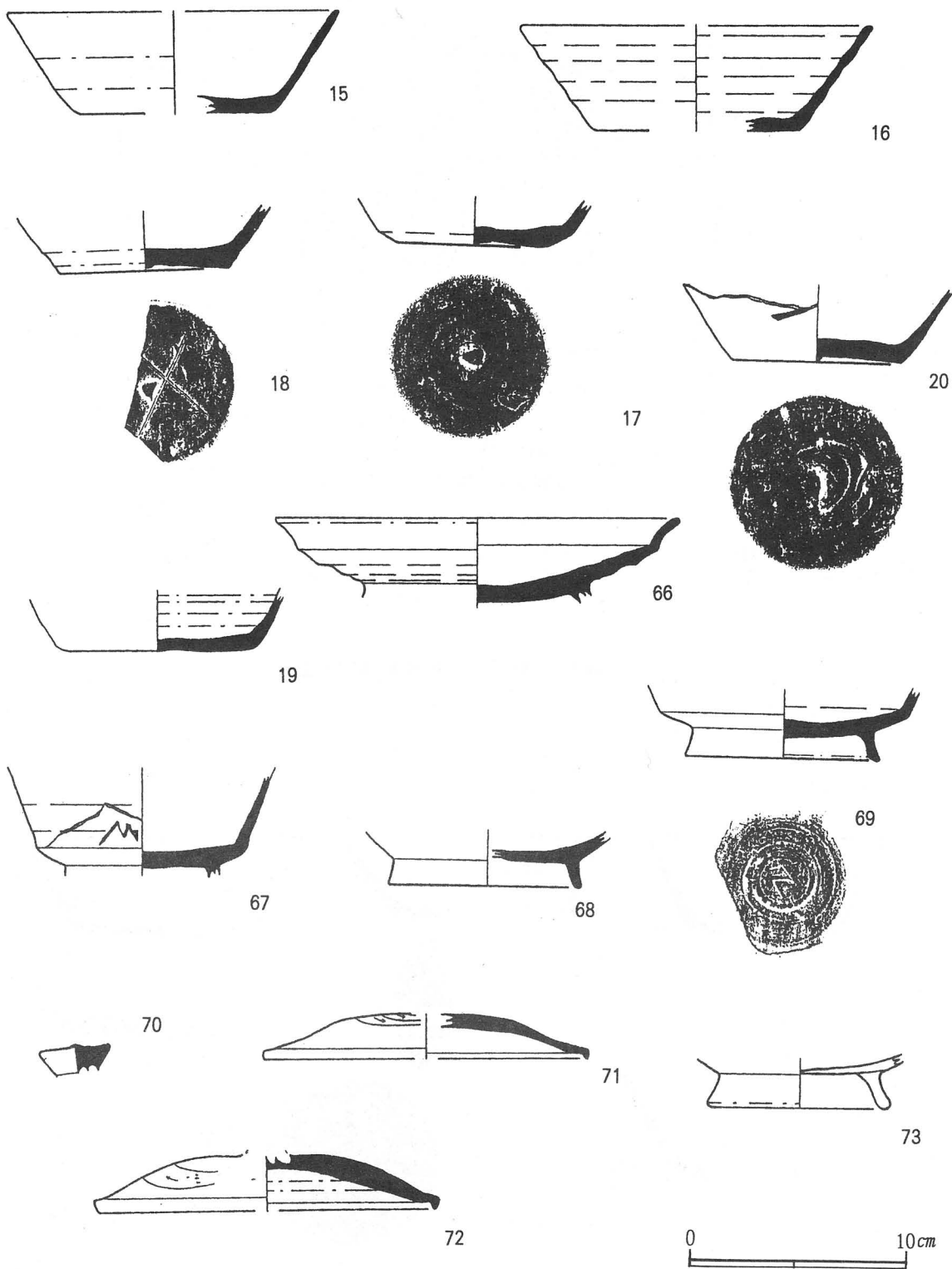
竈は、北壁中央部に壁を50cm壁外に掘り込み、長さ1.9m・巾1.4mの楕円形を呈している。天井部は崩落しているが、袖部は良く遺存している。燃烧部からは、焼土粒子・炭火粒子が検出され、火床部は真赤に焼けている。煙道は確認されなかった。遺物は、土師器・須恵器の底部破片が多く、その中に墨書土器3点、底部からへら記号2点が含まれて出土した。



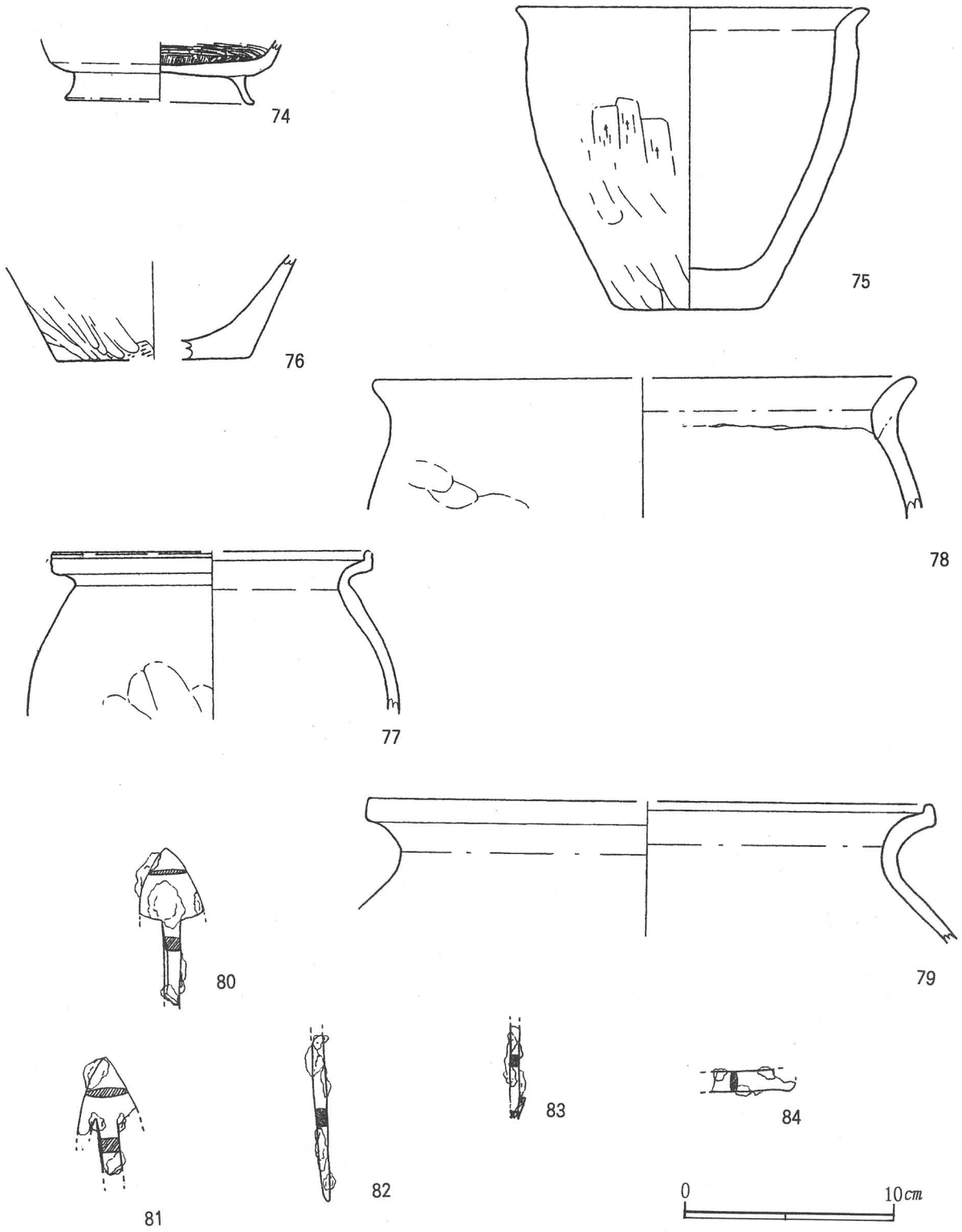
第12図 第3号住居跡実測図



第13図 第3号住居跡出土遺物の実測図 (1)



第14图 第3号住居跡出土遺物実測図(2)



第15图 第3号住居跡出土遺物実測図(3)

表3 第3号住居跡出土遺物観察表

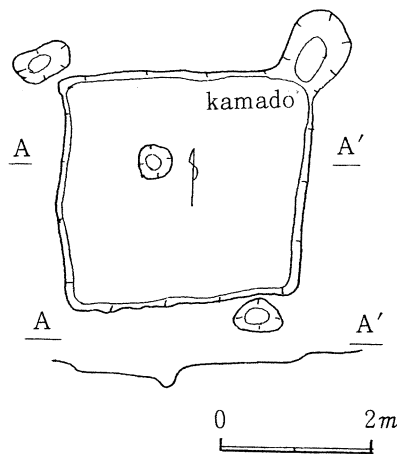
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	坏 須恵器	A (11.7) B 4.7 C (6.8)	底部平底 体部は外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 一方向のケズリ, 体部 下端手持ヘラケズリ	石英・長石 灰色 普通	10%
11	坏 須恵器	A (13.5) B 4 C (8)	平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 水挽痕明瞭 底部 回転ヘラ起こし後,無調整	石英・長石・砂粒 青灰色 良好	20%
12	坏 須恵器	A (13.5) B 4.9 C (8.4)	底部 平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 水挽痕明瞭 底部 一方向のケズリの後,周縁 のみ不定方向ヘラケズリ	細砂 灰色 良好	25%
13	坏 須恵器	A (12.6) B 4.9 C (6)	底部 平底 二次底面を作りながら 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後, 軽くナデ	石英・長石・砂粒 青灰色 良好	25%
14	坏 須恵器	C 8	底部 平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後, 軽くナデ 体部 下端ヘラケズリ	石英・長石 青灰色 良好	底部に墨書有 判読不明 20%
15	坏 須恵器	A (14) B 4.6 C (8.8)	底部 平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラケズリ	石英・長石・細砂 雲母 灰白色 普通	20% カマド内
16	坏 須恵器	A (14.2) B 4.3 C 8.4	体部欠損 高台部接地面は平坦	ロクロ成形 水挽痕明瞭 底部 回転ヘラ起こし後, 軽くナデ	石英・長石・砂粒 青灰色 良好	10%
17	坏 須恵器	C 6.5	平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後,無調整 体部 回転を利用したナデ	石英・長石・雲母 砂粒 灰色 普通	20%
18	坏 須恵器	C 7	底部 平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後,無調整	長石・石英 褐灰色 良好	20%
19	坏 須恵器	C (8.4)	底部 平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後, 軽くナデ 体部 内外面横ナデ	石英・長石・細砂 灰色 良好	20% 自然袖付着
20	坏 須恵器	C 7.2	平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後, 軽くナデ 体部 回転を利用したナデ	石英・長石 灰白色 普通	墨書アリ SI3と SI1で接合 50%
66	盤 須恵器	A 17.2	底部は周縁に向けて徐々に持ち 上がる 口縁部で屈曲し外反する 高台形不明	ロクロ成形 水挽痕明瞭 底部 回転ヘラケズリ 貼付高台	石英・長石 青灰色 良好	80%
67	高台付坏 須恵器		底部 外周がやや持ち上がる 体部 外傾して立ち上がる 高台形不明	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし 高台は1本溝を刻んで貼り付け る	石英・長石 青灰色 良好	体部に墨書 「足」 20%
68	高台付坏 須恵器	D 8.4 E 1.0	底部 外周が持ち上がる 「ハ」の字状に開く高台はやや 丸みを帯び先端で接地する	ロクロ成形 底部 回転 回転ヘラケズリ 貼付高台	石英・長石 黄灰色 普通	20%
69	高台付坏 須恵器	D 8.2 E 1.2	底部 外周がやや持ち上がる 体部 外傾して立ち上がる 「ハ」の字状に開く高台の先端 で接地する	ロクロ成形 底部 回転ヘラケズリ 貼付高台	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	底部にヘラ記 号「九」字状 25%
70	蓋 須恵器	F 3 G 1.3	つまみ部のみ やや高めで接着部が細めになる 中央が高まる	ロクロ成形	石英・長石 灰色 普通	

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
71	蓋 須恵器	A (14)	上面に平坦面を持ち、なだらかに口縁に向け広がる 口縁端部で短く下垂する つまみ欠損	ロクロ成形 上面 回転ヘラケズリ	石英・長石 灰白色 普通	10%
72	蓋 須恵器	A (14.8)	平坦な土面からややふくらみを持って口縁に向けて広がる口縁 端部は短く下垂する。 つまみ欠損	ロクロ成形 上面及び上半部回転ヘラケズリ	石英・長石 黄灰色 普通	10%
73	高台付坏 土師器	D 7.7 E 1.5	高台部のみ やや高めの高台で「ハ」の字状 に開く端部は丸くやや外方を向 く	ロクロ成形 回転を利用したナデ仕上 貼付高台	長石・雲母・砂粒 浅黄橙色 普通	20%
74	高台付坏 土師器	D 9 E 1.3	底部 外周がやや持ち上がり 体部は外傾しながら立ち上がる 高台は「ハ」の字状に開き端部 がやや外に突出する。	ロクロ成形 底部外周 回転ヘラケズリ 底部内面 一方向のヘラミガキ 体部内面 横位のヘラミガキ 貼付高台	長石・雲母 スコリア 浅黄橙色 普通	25%
75	小形甕 土師器	A (16.6) B 14.2 C 7	底部 平底 体部は外傾して立ち上がり、肩 部に張りがある。口縁部に至っ て短く外反し、口縁部で最大径 を有する	体部 上位ヘラケズリ 下位ナデ	砂粒・石英・長石 浅黄橙色 普通	50% カマド内
76	小形甕 土師器	A (13.2)	肩部に張りがある。 口縁部で外方に屈曲し、口縁端 部は上方につまみ上げる	口縁部 横ナデ 肩部 ナデ	石英・長石・砂粒 にぶい橙色 普通	10%未満
77	甕 土師器	C (9)	底部のみ 底部平底 体部外傾して立ち上がる	体部 最下端ケズリ 下位ヘラミガキ	石英・長石 浅黄橙 普通	10%未満
78	甕 土師器	A (25.2)	口縁部は短く外反し、 丸く収まる	口縁部内外面横ナデ 体部 上位ナデ	石英・長石・砂粒 雲母 にぶい橙 普通	10%未満
79	甕 土師器	A (26.6)	縁部は外反し、口唇で上方につま み上げる	口縁部 内外面横ナデ	石英・長石・砂粒 浅橙 普通	10%未満
80	鍍 鉄製品					
81	鍍 鉄製品					
82	鍍 鉄製品					
83	鍍 鉄製品					
84	刃子 鉄製品					

第4号住居跡

調査区A-1の東南隅に確認されている。平面形は、長軸3.2 m・短軸3.0 mの方形を呈している。壁高は10cm~20cmでほぼ垂直して立ち上っていて、床は平坦で硬く締まっている。

柱穴は、床面に1か所、壁外に2か所認められるが、その性格を明らかにしがたい。竈は、北東コーナーの壁から、壁外に80cmほど掘り込み、火床部は赤く焼けている。

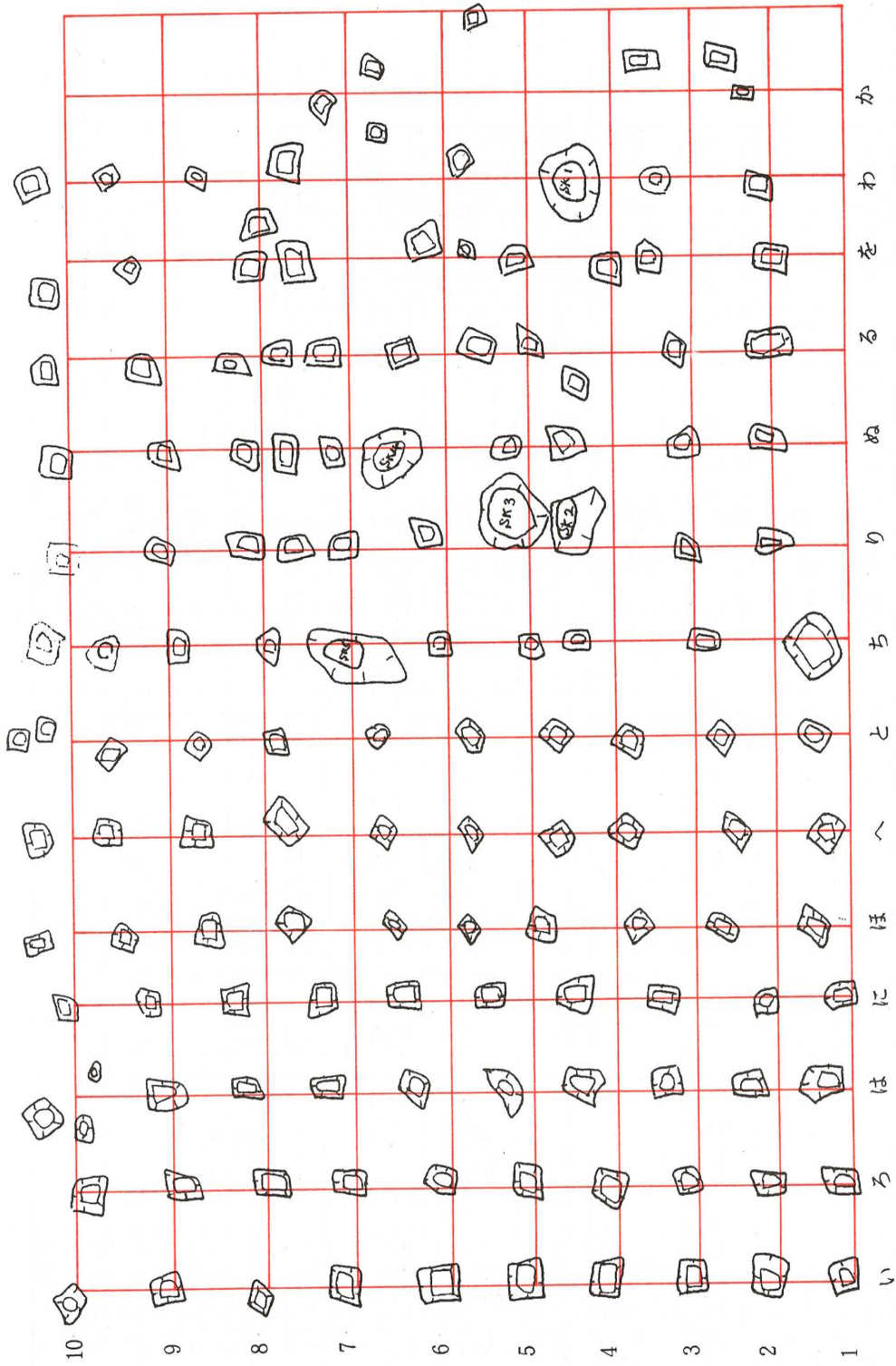


第16図 第4号住居跡実測図

2 掘立柱建物跡

本遺跡では、主として調査区Bから竪穴住居跡が、調査区Aからは、数多くの柱穴が検出された。調査区を拡大することによって、さらに多くの建物跡の柱穴が認められるものと考えられる。本跡の柱穴跡群の配列・配置をみると、整然と碁盤状に配列されている。その柱間の寸法は1 m内外という半間棟であるため、柱数が多く配列されている。これはいわゆる側柱建物に対して、束柱を配した総柱建物跡の柱穴と思考される。棟数については、重複しているとも思われるが、本跡の柱列からみて困難である。

柱穴掘方は、いずれも長径30~60cm・短径25~40cm・深さ15~30cmと浅いが、これは農耕作業による地山面の攪乱によるものである。柱痕跡は明確に検出はできなかった。遺物は、柱穴内から内黒土器破片や土師・須恵器の細片が出土した。構築時期は、出土遺物や竪穴住居跡関連の建物跡と見られるので、平安時代の遺構と考えられる。



第17図 掘立柱建物跡，柱穴配置実測図

表 4 掘立柱建物跡柱穴観察表

記号	平面形	長径短径深さ	底面	出土遺物・他
1	長方形	40 30 15		
2	長方形	60 26 16		
3	長方形	47 33 12		
4	方形	40 38 14		
5	方形	40 34 12		
6	方形	36 35 13		
7	方形	38 38 16		H12片
8	方形	34 27 11		
9	円形	33 24 8		
10	円形	52 35 13		
1	長方形	48 30 15		
2	長方形	42 30 21		
3	方形	28 24 17		
4	方形	38 30 16		
5	方形	36 33 16		
6	方形	35 30 12		
7	方形	36 31 14		H32(黒)
8	方形	35 30 12		H1(黒)
9	長方形	44 29 12		
10	長方形	40 27 15		
1	長方形	44 37 15		
2	方形	32 35 20		
3	方形	34 28 14		
4	方形	45 40 13		
5	円形	40 40 42		H-
6	方形	34 30 14		H-
7	方形	33 30 10		H-(黒)
8	方形	36 29 19		H環(黒)
9	円形	38 34 29		
10	長方形	40 30 25		
1	方形	28 26 18		
2	方形	36 30 10		
3	方形	36 28 20		
4	方形	36 27 8		
6	長方形	40 30 18		
7	方形	32 32 12		
8	方形	40 33 16		
9	長方形	28 22 19	H8,SK8	
10	方形	32 30 13		
1	長方形	40 29 25		
2	方形	31 29 20		
3	円形	33 32 24		
4	方形	31 30 31		
5	方形	30 28 21		
6	方形	30 29 21		
7	長方形	37 27 29		
8	長方形	34 27 24		
9	長方形	40 28 34		
10	長方形	45 33 31	sk7	
1	方形	40 30 25		
2	長方形	50 34 29		
3	円形	35 30 27		
4	円形	30 30 26		
5	長方形	35 27 17		
6	円形	29 24 11		
7	円形	59 52 23		
8	長方形	34 34 23		
9	方形	34 27 21		
10	方形	30 27 20		
1	方形	32 30 33		
2	方形	35 33 31		
3	方形	35 28 21		
4	方形	36 32 25		
5	方形	35 25 23		
6	方形	28 18 19		H1
7	方形	29 28 18		
8	方形	37 32 15		
9	円形	75 67 30		
10	長方形	58 38 36		
1	長方形	37 27 11		
2	長方形	40 37 22		
3	方形	45 30 17		
4	方形	32 30 20		
5	方形	35 34 15		
6	長方形	30 25 16	SK-5	
7	方形	33 32 12		
8	方形	37 34 15		
9	円形	33 30 6		
10	方形	38 32 24		
1	長方形	45 34 29		
2	長方形	38 25 24		
3	楕円形	60 39 29	SK-2	
4	楕円形	53 43 24	SK-3	
5	方形	36 35 24	H3	
6	方形	37 28 17		
7	長方形	40 32 19		
8	長方形	40 33 19		
9	方形	34 30 22	H2	
10	方形	36 36 17		
1	方形	36 31 15		
2	方形	38 36 16		
3	方形	47 44 30		
4	円形	32 29 6		
5	楕円形	55 30 11	SK-4,H3,T3	
6	方形	34 34 15		
7	方形	33 31 12		
8	方形	32 29 11		
9	方形	38 36 16		
10	長方形	46 31 12		
1	長方形	60 39 16		
2	長方形	38 34 25		
3	長方形	28 22 11		
4	長方形	45 36 16		
5	長方形	58 38 36		
6	長方形	37 27 17		
7	長方形	32 30 13		
8	長方形	44 29 13		
9	長方形	44 33 16		
10	方形	34 31 19		
1	方形	37 34 14		
2	長方形	40 29 12		
3	長方形	47 39 35		
4	方形	34 34 14		
5	方形	28 27 11		
6	長方形	58 47 37		
7	長方形	46 43 15		
8	長方形	46 38 36		
8	長方形	35 32 21		
9	方形	26 26 6		
10	方形	29 28 5		
1	長方形	36 27 18		
2	円形	40 30 22		
3	楕円形	33 27 12		
4	方形	27 21 21		
5	方形	43 40 18		
6	方形	30 27 9		
7	方形	32 26 9		
8	方形	50 38 11		

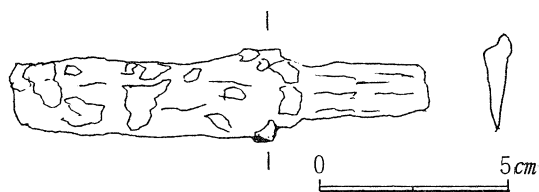
註 出土遺物・他の欄での略記
 ・SK=土坑・H=土師器
 ・S=須臾器
 ・T=鉄片
 (遺物はすべて破片数で、黒は黒色処理)

3 墓 壙

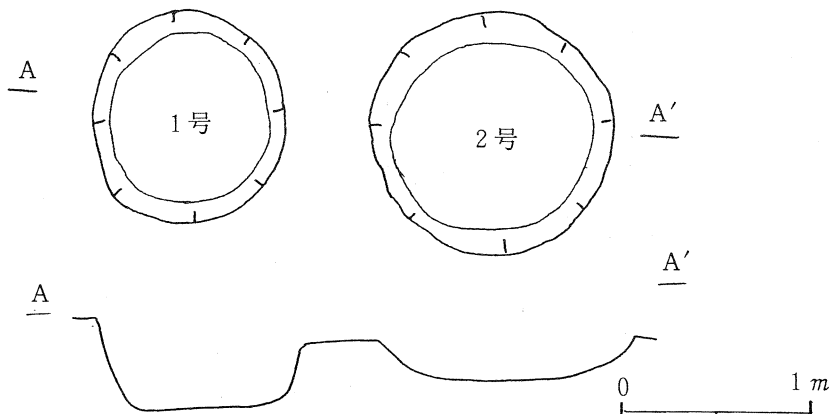
原遺跡第3号住居跡南壁中央部(拡張部)の、表土下約55cmのローム面から、円形の落ち込みが確認(標高93.45m)された。最初この黒色面は、住居跡内の貯蔵穴ともみたが、調査によって、円形の墓壙2基が検出された。その形態は、ほぼ直円の平面形を呈し、1号墓の径100cm・壁高50cm、2号墓の径130cm・壁高30cmを測る。墓穴の深さとしては浅くなっているが、これは、土万頭に盛り上げられたと思われる封土が、開墾や長い間の農耕作業等による、削平によつての攪乱によるものである。

墓壙内からは、人骨・古銭・短刀残欠・数珠玉などが出土している。出土した古銭は、別表の通りであるが、判読不明の12枚を含めて計42枚の貨幣が出土している。出土貨幣の鑄造地は、国内銭1枚で他は、中国からの渡来銭である。中でも北宋銭は、元祐通宝4枚他8枚の計12枚と、明銭が永楽通宝の12枚である。

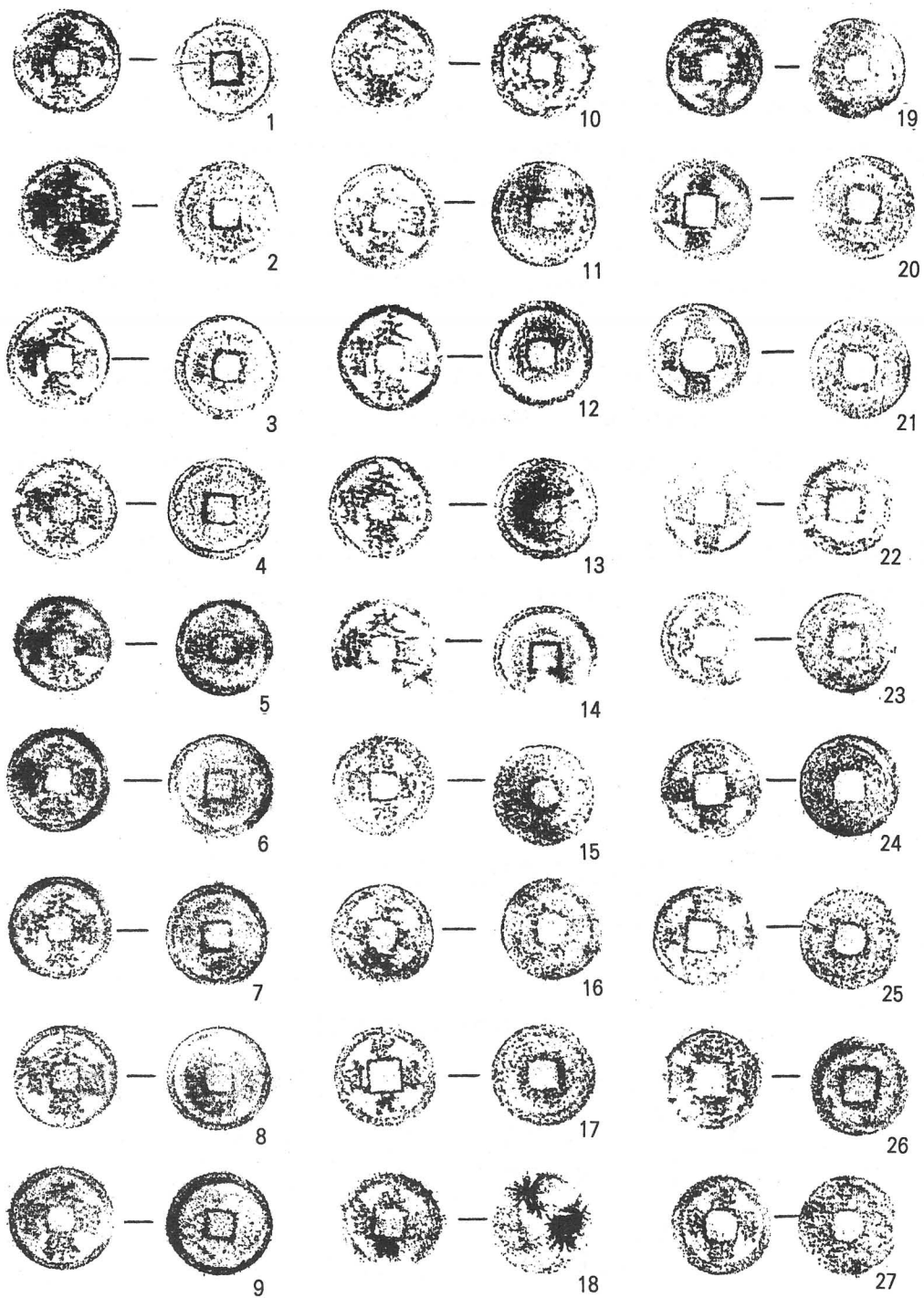
国内銭は、慶長6年鑄造の慶長通宝1枚が出土している。他に判読困難な不明銭12枚出土している。本墓壙から古銭の出土は、1号墓36枚、2号墓6枚の合計42枚である。



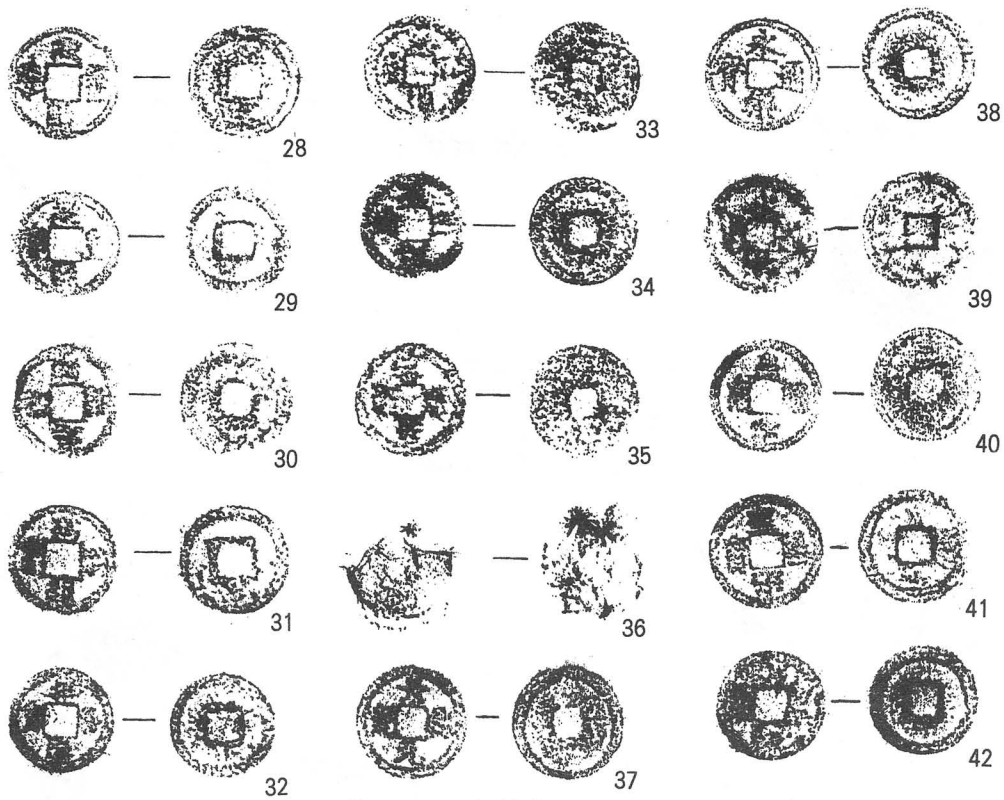
第18図 墓壙出土遺物実測図



第19図 墓壙実測図



第20図 古錢拓影図(1)



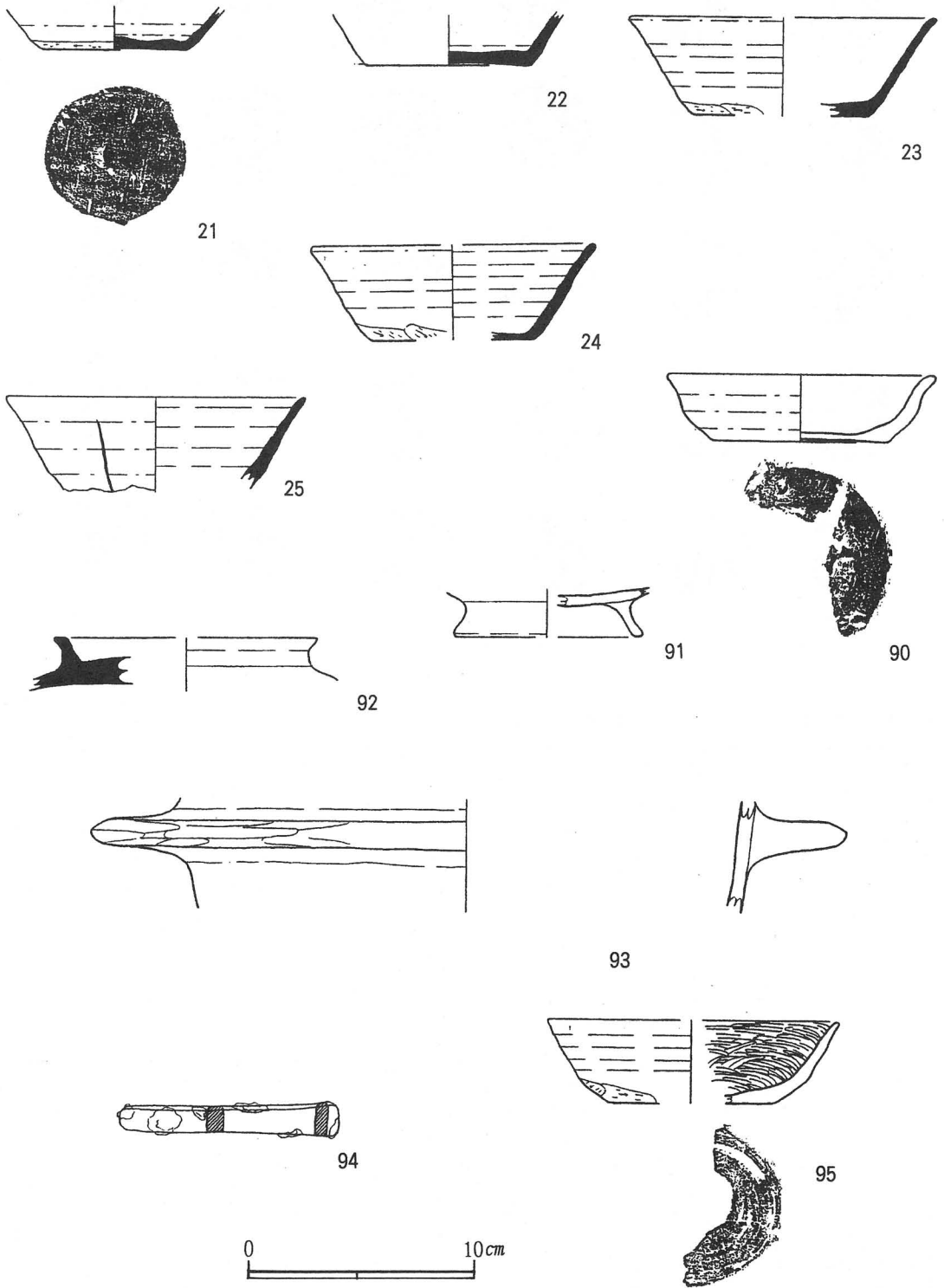
第21図 古銭拓影図(2)

表5 墓境内出土古銭一覧表

番号	銭名	初鑄造年	鑄造地	銭種	径cm	出土地
1	永樂通宝	1408	明	銅	2.5	1号墓
2	"	"	"	"	"	"
3	"	"	"	"	"	"
4	"	"	"	"	"	"
5	"	"	"	"	"	"
6	"	"	"	"	"	"
7	"	"	"	"	"	"
8	"	"	"	"	"	"
9	"	"	"	"	"	"
10	"	"	"	"	"	"
11	"	"	"	"	"	"
12	"	"	"	"	"	"
13	"	"	"	"	"	"
14	"	"	"	"	"	"
15	紹興元宝	1131	南宋	銅	2.5	1号墓
16	治平元宝	1064	北宋	銅	2.5	1号墓
17	皇宋通宝	1039	北宋	銅	2.5	1号墓
18	元豐通宝	1078	北宋	銅	2.5	1号墓
19	慶長通宝	1606	日本	銅	2.5	1号墓
20	元祐通宝	1086	北宋	銅	2.5	1号墓
21	"	"	"	"	"	"
22	解説不明	-	-	銅	2.4	1号墓

番号	銭名	初鑄造年	鑄造地	銭種	径cm	出土地
23	解説不明	-	-	銅	2.4	1号墓
24	"	-	-	"	"	"
25	"	-	-	"	"	"
26	"	-	-	"	"	"
27	"	-	-	"	"	"
28	元豐通宝	1078	北宋	銅	2.5	1号墓
29	"	"	"	"	"	"
30	"	"	"	"	"	"
31	解説不明	-	-	銅	"	1号墓
32	"	-	-	"	2.4	"
33	元祐通宝	1086	北宋	銅	2.5	1号墓
34	"	"	"	"	"	"
35	解説不明	-	-	銅	2.5	1号墓
36	"	-	-	"	"	"
37	皇宋通宝	1004	北宋	銅	2.5	2号墓
38	永樂通宝	1408	明	銅	2.5	2号墓
39	"	"	"	"	"	"
40	皇宋通宝	1039	北宋	銅	2.5	2号墓
41	"	"	北宋	"	2.4	"
42	解説不明	-	-	銅	2.4	2号墓

・解説不明の古銭は、腐蝕等のため銭名が読めなかった。



第22図 遺構外出土遺物実測図

表 6 遺構外出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
21	坏 須恵器	C 6.4	底部は平底 体部は外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後 一方向のケズリ 体部 下端ヘラケズリ	石英・長石・雲母 浅黄灰色 普通	20% 表 採
22	坏 須恵器	C 6.4	平底 底部 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラ起こし後 軽くナデ	砂粒・雲母 スコリア 浅黄橙色 普通	30% B-3区出土
23	坏 須恵器	A (13.5) B 4.9 C (8.4)	底部 平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 水挽痕明瞭 体部 下端手持ヘラケズリ 底部調整有	細砂 灰色 良好	25% 自然袖付着 A-2区出土
24	坏 須恵器	A (12.8) B 4.4 C (7.3)	底部 平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 体部 下端手持ヘラケズリ 底部 一方向のヘラケズリ	石英・長石・雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	25% A-3区出土
25	坏 須恵器	A (13.5)	体部 外傾して上方にのびる	ロクロ成形 体部 回転を利用した横ナデ	石英・長石 褐灰色 良好	20% 体部にヘラ 記号有 A-3区出土
91	高台付坏 土師器	D (8.5) E 1.6	高台は「八」の字状に開き端部 は丸い	ロクロ成形 内面 黒色仕上, ミガキ 貼付高台	石英・長石 浅黄橙 普通	10%未満 A-3区 ピット内出土 (は-17)
92	盤 須恵器	D 12 E 1.3	台は「八」の字状に開き, 接地 面は平坦端部まで外方に突出す る	ロクロ成形 底部 回転ヘラケズリ 高台は二本の溝を刻んで貼り付 ける	石英・長石・雲母 褐灰色 良好	10%未満 A-4区
93	羽 釜 土師器		ツバ部のみ	ツバ部 ナデ仕上 体部に二本の溝を刻んでツバを 貼り付ける	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	10%未満 A-1区出土
94	不 明 鉄製品					
95	坏 土師器	A (12) B 3.7 C (7.4)	底部は平底 体部 外傾して立ち上がる	ロクロ成形 底部 回転ヘラケズリ 体部 下端手持ヘラケズリ 内面 黒色仕上	石英・長石 にぶい橙色 普通	40% A-1区
90	高台付坏 土師器	D (8.5) E 1.6	底部 平底 体部 丸みをもって立ち上がり 口縁部で外反する	ロクロ成形 底部 回転糸切り	石英・長石・砂粒 にぶい橙色 普通	40%

ま と め

1 住居跡について

今回の発掘調査によって、住居跡4軒と総柱の掘立柱建物跡が検出された。その形態や遺物等から推して、古代の集落跡と思われる原遺跡の所在する笠間市は、古代常陸国新治郡に属し、その東辺に在ったので、中世に至っては東郡とも呼ばれた地域でもある。

前出『常陸国風土記』にいう、「郡ヨリ東50里笠間村アリ……」の笠間村は笠間市を指している。同じく古代の駅塚「大神駅」の所在についても、諸説はあるが、笠間市域に在ったことは間違いのないところである。

昭和48年発行の「かさま市報」9月号に、「大神駅」に関する拙稿の記事が掲載されているので、次にその概略を紹介し参考に供したい。

「福原から、岩瀬町羽黒に向う、国道50号線の南側の旧道は、江戸時代の結城街道で並木と呼ばれている。その近くにフジャマとって、古墳のような丸い山と、小さな溜池がある。このあたりをスクモ塚と土地の人々呼んでいる。スクモ（スクボ）とは、もみがら・もみぬか・ノゲなどのことで、馬の飼料にしたもので、それが小山のように高く積み重ねられて、ちょうど塚のようになっているので、「スクモ塚」と呼称され地名となって残っている。

古代の駅家跡には、長者（駅長）屋敷とか「スクモ塚」などという呼名が各地に残っているので、福原字南中山にあるスクモ塚は、古代の駅家跡ではないかと考えられる。駅家とは、駅路に駅馬の置いたところで、大化改新後諸国に駅家が設けられ、中央と地方を結ぶ官道が整備された。岩間町に所在したと思われる安俣駅などは、よく知られているが、大神駅はあまり重要でなかったため、早く廃止されたため、その所在がわからなくなったと思われる。

『常陸国風土記』に「新治郡ニ駅家ガアル、ソノ名ヲ大神駅トイウ、ソノウケハ此ノ地方ニ大蛇ガ多クイタノデ、大神駅ト名付ケタ」とある。

笠間地方は、新治郡大神郷（巨神郷）に属していたので、笠間市域のどこかに駅家が設置されたわけだが、今のところその所在については不明である。しかし稲田に姫宮・関戸に姫親神を祀る神社や、ヒの川などの大蛇にまつわる伝説もあるし、この地方にむかし大蛇が多くいたという風土記の記事は、空論ではないと考えることができる。大神駅の所在を、市内大郷戸とする説もあるが、国府（石岡市）より安俣駅・大神駅を経て、下野国（栃木県）に至る駅家の所在は、福原の「スクモ塚」周辺に求めることができる。」

福原スクモ塚と福原原遺跡とを、直線で結ぶと1000mの至近距離に位置している。古代新治郡大神駅家跡の所在を考える場合、スクモ塚の地名と共に、原遺跡の集落跡との関連性についても十分考察する必要がある。

原遺跡の第1号・第2号の大形住居跡は、工房跡とも思われたが、古代駅家跡が近くに所在するとすれば、亦本跡から検出した総柱の建物跡や、数点の墨書土器の出土とも併せ考えて、駅家関連の集落跡の所在も考えられるところだが、今回の調査は遺跡の所在する原台地の一部とも思われるので、遺跡の全様を知ることはできない。

2 墓壇について

中世から、近世にかけての墳墓の形態としては、平地墳墓と横穴式墳墓（やぐら）がみられる。中世の集落跡の調査において、土壇が数多く検出されているが、その土壇中には、埋葬墓壇とみられる平地式の墳墓がみられる。これらの土壇墓は、単独して存在することは少なく群集して存在する墓域を形成している。近世以降の墓域（墓所）は、墓印としての石塔や石碑（墓碑）を建立するので、一目に了知ができる。中世から近世初期にかけての墓所としての墓壇は、集落跡の発掘調査中、たまたま発見される場合が大部分である。本跡においては、第3号住居跡の掘り込み中北壁部に2基の円形墓壇が検出されたが、調査区の拡張によっては、墓域の拡大する可能性は考えられるところである。

また副葬品としての、古銭中「慶長通宝」の出土例は、調査中においては少ないといわれる。従ってここに原遺跡に所在したと思われる墓域は、近世初期の埋葬施設と考えられる。前出の調査日誌においては、当初「永楽通宝」のみしか確認できなかったので、中世の墓壇ではないかと記録したが、遺物整理によって、渡来銭の中に慶長通宝が混在したことによって、墓壇の時代設定は近世初期と推定した。

発掘に参加して

◇猛暑の夏も過ぎて、リンドウのつぼみも色づき始める頃、全く考えてもいなかった遺跡の発掘作業に、参加させて頂きました。テレビでしか見たことのない事だけに、こんな身近な所で、しかも自分のこの手で、触れる事が出来るなんてと好奇心でいっぱいでした。最初は多少のとまどいもありましたが、毎日が楽しく足腰の痛さなどすっかり忘れさせてくれました。遺跡は平安の頃のものとか、日を重ねるにつれて住居跡やカマドの跡、また掘立柱の大きな建物の跡など次々と現れ、昔の人の暮らしを偲びながら、久し振りに子供に返ったような気持ちで、手スコを持つ手を弾ませました。本当に思いも掛けず、貴重な体験を得させて下さった事に感謝し、これからは、多少なりともきつこうした事に、興味をもつ人生を送れることと思います。何時までも今回の思い出を大切に抱きしめて行きたいと思います。
(福原・秋山 トヨ)

◇昨年10月5日から1か月間、近所の奥さん達と発掘に参加しました。最初は、どんな事をするのか不安でしたが、毎日楽しく作業することが出来ました。発掘作業は、根気のいることなので2～3日は疲れました。土器の破片が見つかったら、今度はどんな物が出てくるのかと、楽しみながらの作業で、まるで幼稚園生の芋掘りの心境です。先生の説明で出て来た土器は、土師器や須恵器で、奈良から平安時代のものわかりました。今から千年も前の時代なので、どんな暮らしをしているのかも想像もつきませんが、こんどの発掘作業で、この台地に住んでいた昔の人々の、生活の一部に触れる事ができ、参加して良かったと思いました。
(福原・大崎きみ子)

◇発掘のお手つだいということで、お話がありましたので、興味と好奇心もあって参加させて頂くことになりました。発掘作業は地鎮祭が終わると、一輪車・箕などによる土運びから始まりましたが、日頃運動不足ぎみの私たちにとっては、少々きつい仕事でした。最後まで続けられるか不安でしたが、先生が最初に言われた「発掘は土方ではありません。研究の気持ちで行うように。」との言葉に励まされ、発掘作業を続けることが出来ました。発掘が進み、土師器・須恵器等の土器の破片がぞくぞくと出土し、住居跡・建物跡と次々に姿を現し始めると、毎日が楽しみになってきました。千年も昔の、私たちの祖先であったであろう人々の暮らしを想像し、現代の自分たちの生活と比較してみると、遠い昔が懐かしく、その時代に戻ってみたいような複雑な心境になりました。発掘と言う仕事は、本当に細かい根気のいる大変な仕事ですが、やさしい先生方に親切丁寧なご指導をうけ、楽しい日々を過ごさせて頂きました。このような機会を与えてくださって、本当に有難うございました。
(福原・大崎まつ江)

◇発掘ということを知って、無知な私の頭に浮かんだことは、テレビで見るように、ツボやカメなどの土器を、手ぼうきなどを使って取り出すそんな光景でした。実際には何日彫っても小さな破片ばかり、どうして何も無いところを、しかも丁寧に掘るのだろうと、思いながらの作業が続き

ました。日にちが過ぎ先生方の説明を聞きながら、段々と土の色の変化を見つける事も出来るようになってきました。まず土器の発見に始まり、住居跡なども見つけ、この台地に生活した、昔の人々の生活を想像したりしました。終りに近づく頃は、この先も掘り進んだら、どんなだろうと興味が湧いてきて、毎日が張りのある楽しい日々でした。

いろいろ教えて頂いても、おぼえている事はほんの少しですが、私の人生では、初めての経験をさせて頂きました。畑仕事をしていても、一つの小さな土器の破片に「ハッ」と手を止めるこのごろです。またこのような機会がありましたなら、参加させて頂けたらいいなと思っております。

(福原・田村えい子)

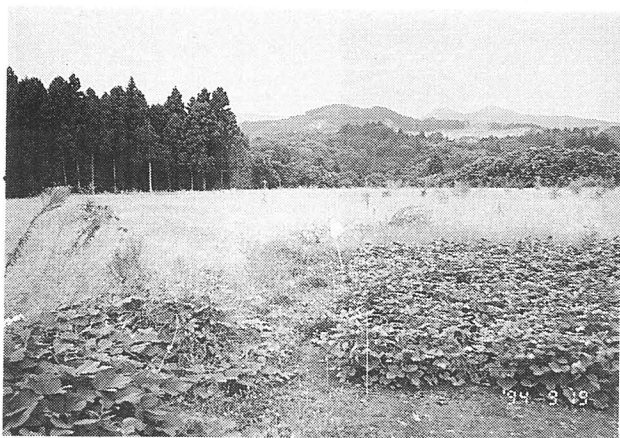
◇教育財団で、発掘の仕事をしている娘にすすめられて、私のような者でも勤まるのかと不安と好奇心で参加しましたが、はじめの2日間は、草刈りと一輪車押しで汗だくだくで、大変な仕事だと思いました。ジョレンで土を除いて色が変わった土を見つけては、「先生ちょっと見てください、おかしいですよ。」と呼びましたら、先生は「やっぱり出たな、柱の穴の跡らしい、もっとあるはずだ。」といわれ、神秘的な物を見つけたように、胸がワクワクして楽しくなりました。掘り進むうちに、柱の穴がきちんと並んでいるのを見て、平安の頃の祖先の家造りの正確さに感心したり、遺物が出るたびに、先生の説明を聞いて急に古代に興味が出て、家に帰れば一日の出来事や、どんな遺物が出たとか娘に報告したり、娘の高校の古代史の教科書を借りては読んだりして、60の手習いをしました。また土器の破片を何点かつなぎ合わせて、本やテレビで見るよりは規模は小さいけれど、同じ遺跡の発掘だったんだと思うと、自分の住む福原の地で、郷土の歴史に残る発掘に参加して勉強したこと、また私がつなぎ合わせた土器が、笠間市に保存されると思うと、発掘作業に参加したことに誇りを感じました。先生、私と娘に楽しい思い出を下さって、有難うございました。

(福原・仁平ふみ子)

◇機会がありまして、原遺跡の発掘に参加することが出来ました。専業主婦である私には、当初自分なりに考えていた作業とは、大変異なったもので戸惑うばかりでした。特に表土の除去作業の数日間は、毎日身体が痛く家族に笑われる始末でした。しかし家に閉じこもりがちな私には、同じ作業をした近所の人々との話し合いや、コミュニケーションを楽しみに毎日を過ごすことができ、大変有意義なものを得ることが出来ました。作業が進むにつれ、土師器や須恵器の破片が出たり、古銭を発見したり、素人の私なりに興味をもちました。住居跡や土坑がはっきりと、台地上に姿を現したとき、改めて大昔の人々が自分立っているこの場所で、堂々と生活をし、秋の収穫に喜び夏の雷雨に恐れ、あるいは生命の誕生を祝っていたと思うと、感慨深いものがありました。

秋深まるころ、この吾国山の山懐に抱かれた、台地の発掘作業が終わりました。いにしえの人が、遠くに吹く風の中「ご苦労さま」と言ったかのように思われました。(福原・宮崎 瑞子)

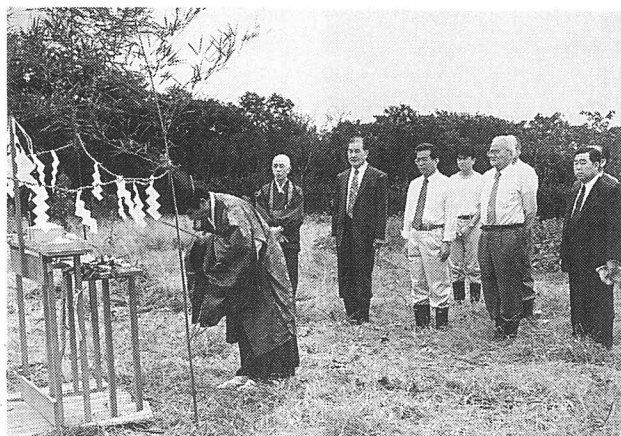
写 真 图 版



調査前全景



調査区芝刈り



調査区清祓



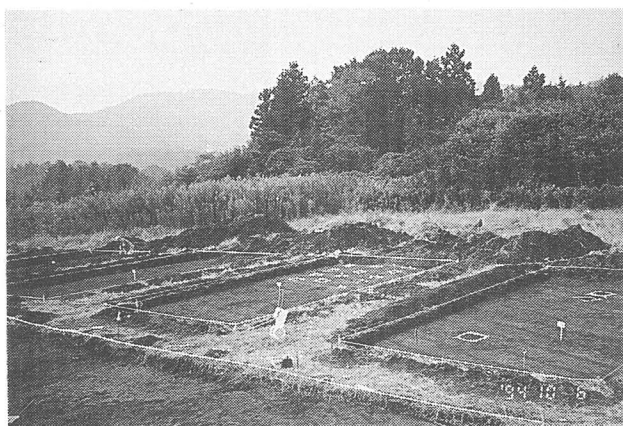
遺構確認作業



遺構確認作業



遺構確認状況



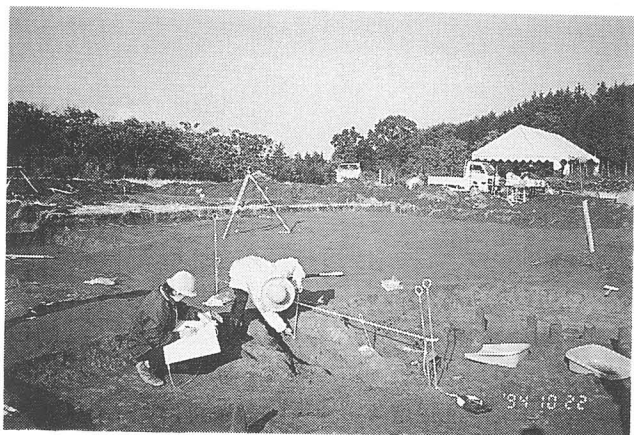
遺構確認状況



調査風景



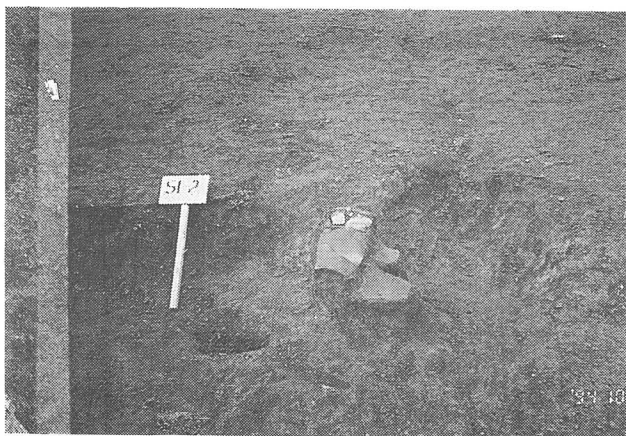
調査風景



調査風景



小学生の見学



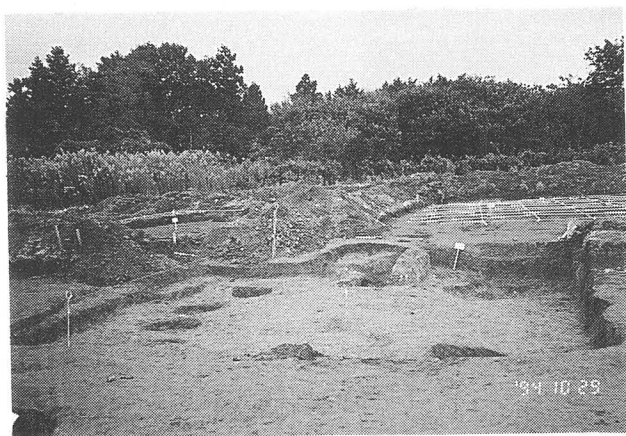
遺物出土状況



遺物出土状況



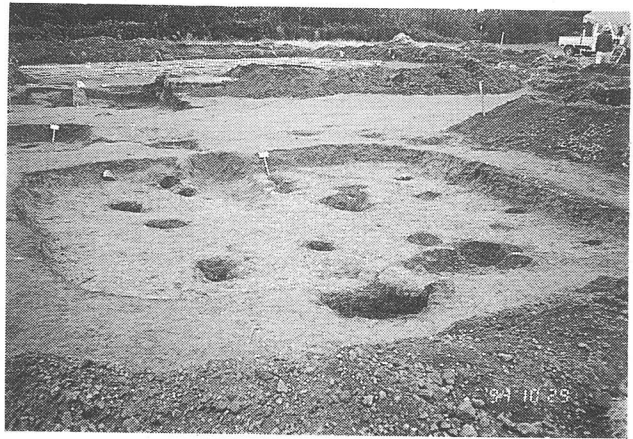
遺物出土状況



第 1 号住居跡



第 2 号住居跡



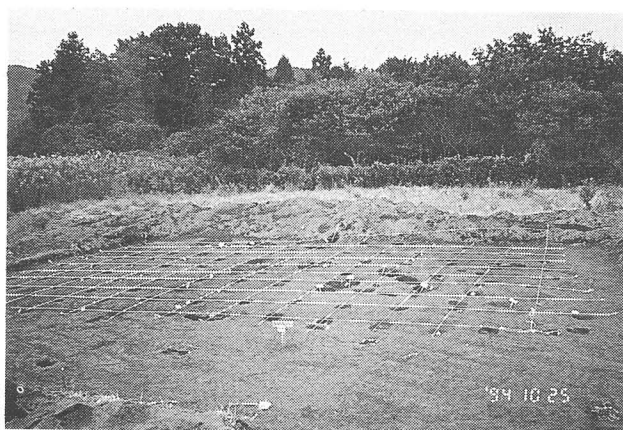
第 3 号住居跡



第 1・2・3号住居跡



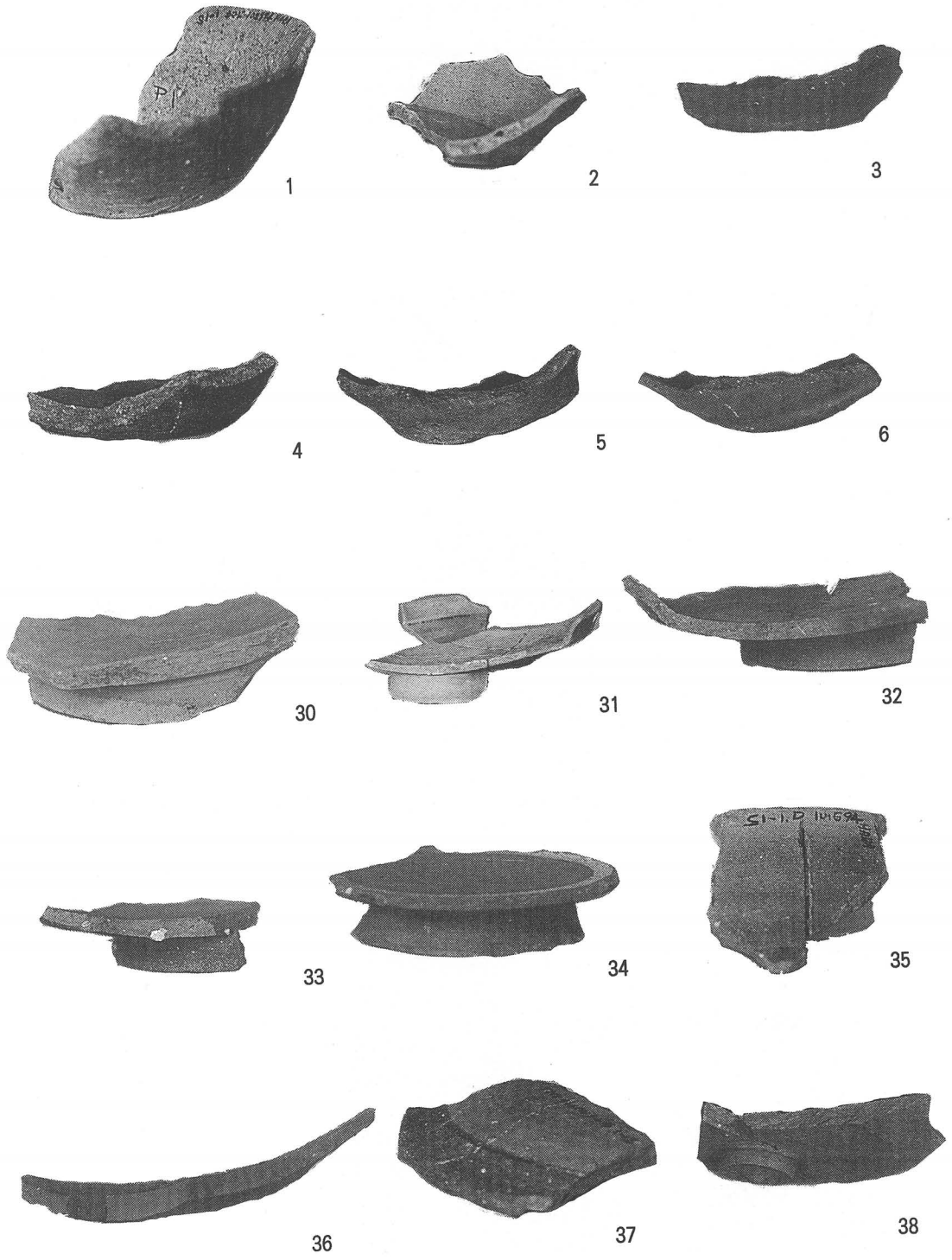
第 4 号住居跡



掘立柱建物跡



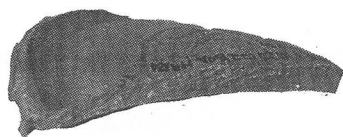
墓 墳 2 基



第 1 号住居跡出土遺物 (1)



39



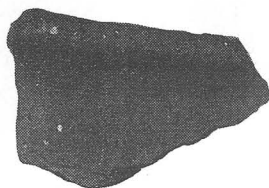
40



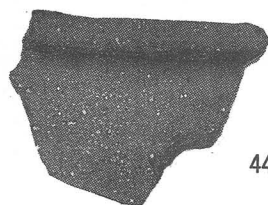
41



42



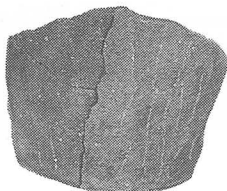
43



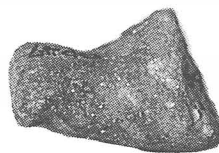
44



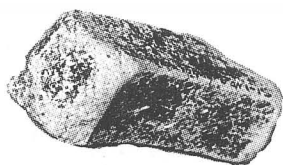
45



46



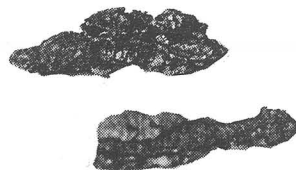
47



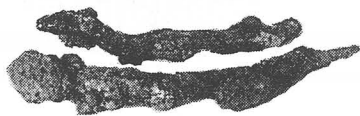
48



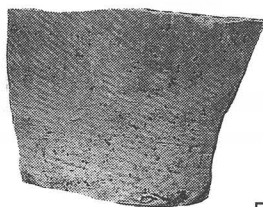
49



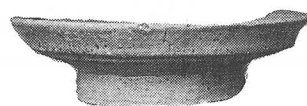
50-51



52-53



54



55

第 1 号住居跡出土遺物(2)



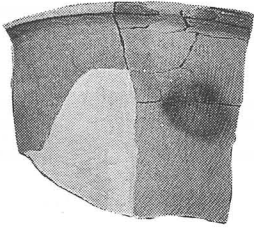
7



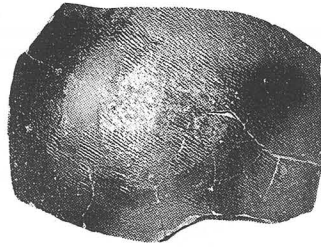
8



9



60



61

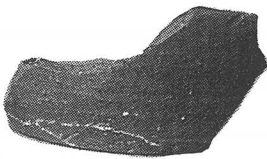


62

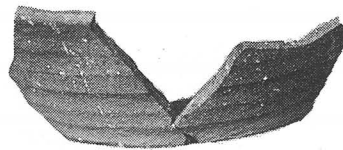


63

第 2 号住居跡出土遺物



10



11



12

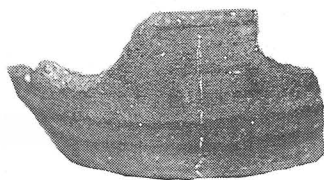
第 3 号住居跡出土遺物(2)(1)



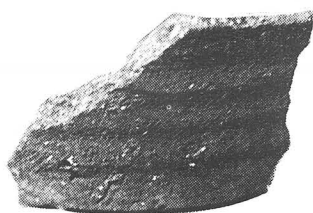
13



14



15



16



17



18



19



20



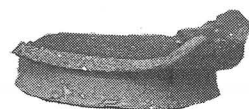
66



67



68



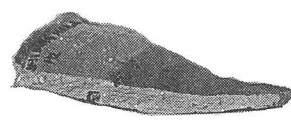
69



70

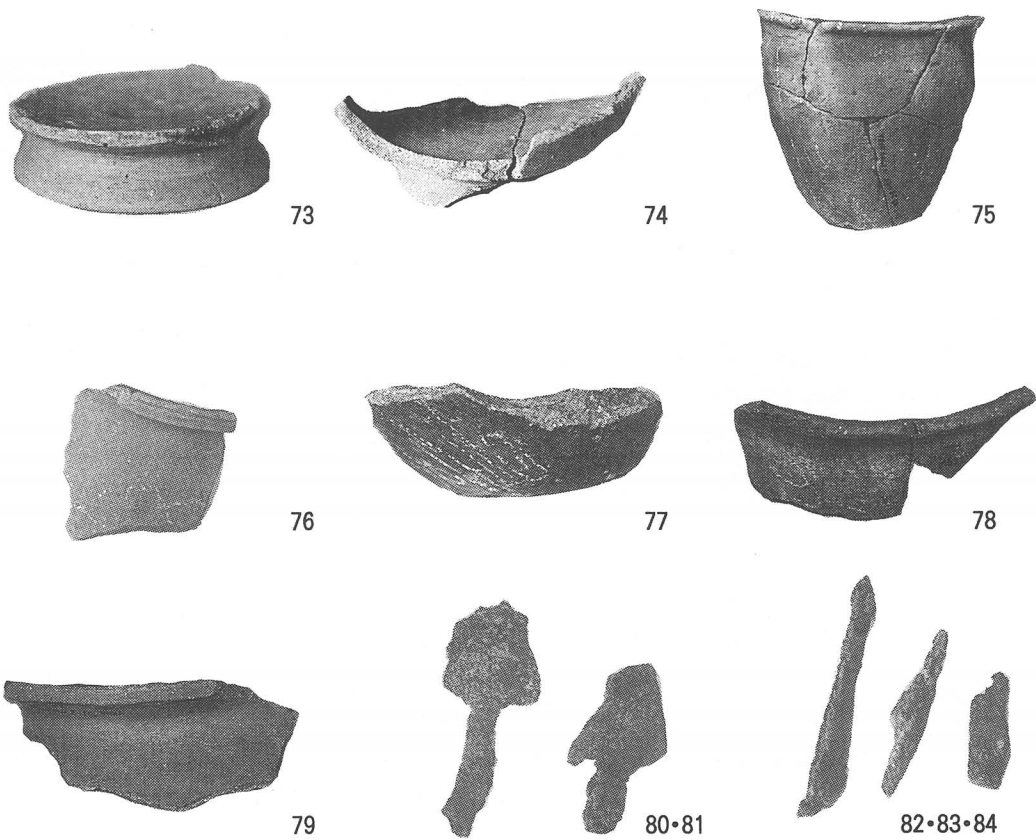


71

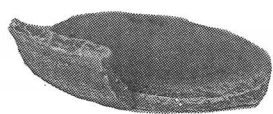


72

第3号住居跡出土遺物(2)



第 3 号住居跡出土遺物(3)



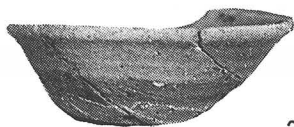
21



22



23



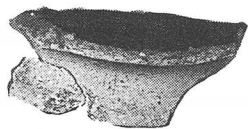
24



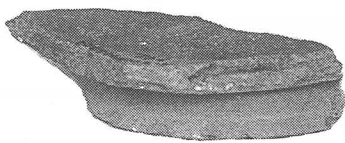
25



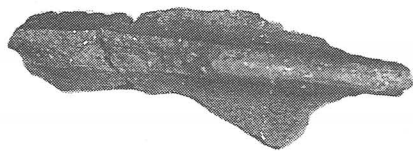
90



91



92



93

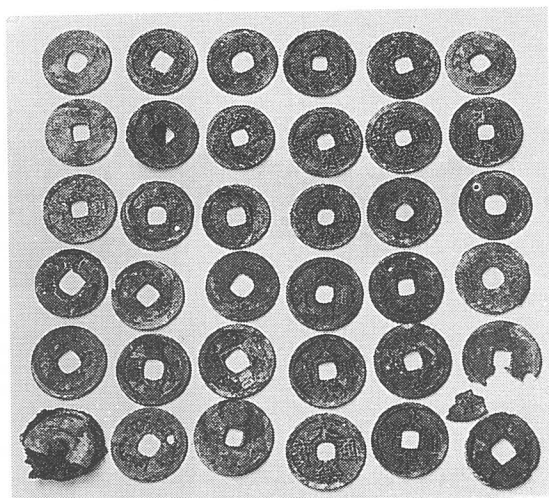


94

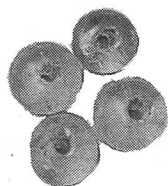


95

遺構外出土遺物



古 銭



数 珠 玉



鉄 製 品 (短刀)

墓 壙 内 出 土 遺 物

笠間市埋蔵文化財調査報告書第8集

福原原遺跡

平成7年3月1日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行 笠間市教育委員会
同 福原原遺跡発掘調査会
印刷 笠間印刷

